日田市埋蔵文化財調査報告書第39集

葛 原 遺 跡

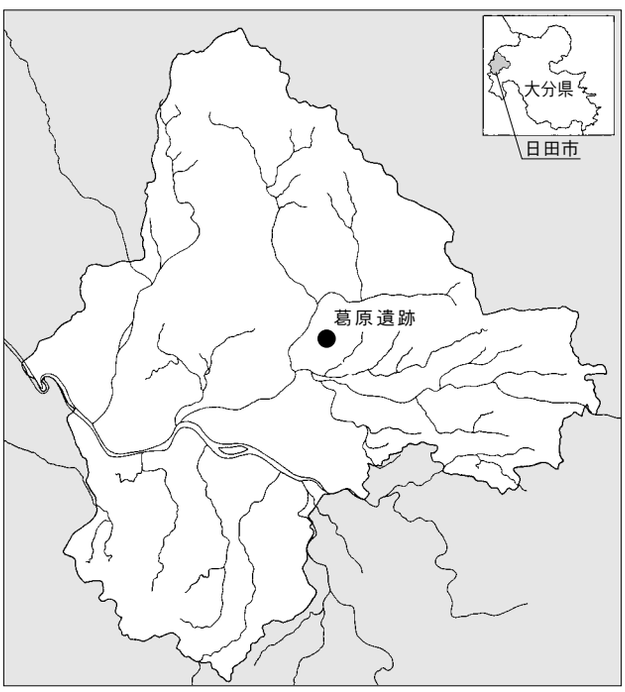
2002年

日田市教育委員会

日田市埋蔵文化財調査報告書第39集　葛原遺跡

2002年

日田市教育委員会



調査区位置図

葛原遺跡遠景

序　　文

近年のめまぐるしい経済発展のなか、農畜産物の流通、資材の運搬等の効率的流通体制を整備し、地域農業の振興に寄与する目的で、日田市の各生産団地を結び、高速道路や国道などの主要幹線道路へのアクセス道路として広域農道整備事業が計画･実施されております。

この広域農道は熊本県小国町から大分県日田市を結び、九州横断自動車道日田I.Cへ通ずる路線計画で、昭和57年度から日田市内では事業が開始され、昭和62年度からこれに伴います試掘調査、発掘調査を行ってまいりました。

今回報告いたします葛原遺跡は平成13年度にこの広域農道整備事業有田工区の実施に先立ち調査を行った遺跡で、その成果をまとめたものです。

調査では西有田地区における古墳時代の人々の生活の足跡を辿ることが出来ました。

本書が、新たなる農畜産物流体制の確立の代償として、失われゆく地域の歴史を記録した一資料として、教育の普及、啓蒙にご活用いただければ幸いに存じます。

調査にあたりまして、ご指導賜りました諸先生方をはじめ、ご協力をいただきました地元の皆様方、関係者の方々にたいし、心より感謝を申し上げます。

平成14年12月

日田市教育委員会教育長　後　藤　元　晴

例　　言

１. 本書は大分県日田地方振興局より委託を受けて行った「県営日田地方広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の５」である。

２. 調査中には小田富士雄氏（福岡大学教授）に現地において各分野からのご指導をいただいたほか、下村智氏（別府大学助教授）にご指導をいただいた。また、県耕地課や地元の方々には現場作業にあたり、様々な便宜を図っていただいた。記して感謝申し上げます。

３. 調査担当は試掘が若杉、本調査が渡邉である。

４. 本書に掲載した遺構写真は、担当者のほか雅企画有限会社　長谷川正美氏の委託によるものを、空中写真については、有限会社スカイサーベイ九州の委託によるものを使用した。また、遺物写真については、雅企画有限会社長谷川正美氏に撮影委託したものを使用した。

５. 発掘現場での実測作業は担当者が行ったほか、雅企画有限会社　森山敬一郎氏、財津真弓氏の委託による。遺物実測については担当者が行った。

６. 遺構・遺物の製図は担当者が行ったほか、雅企画有限会社の委託によるものを使用した。図版中の番号は全て挿図番号と一致する。

７. 遺構から出土した遺物及び図面については、すべて日田市埋蔵文化財センターにて保管

８. している。

９. 本書に使用した遺構図の方位についてはすべて磁北である。

10. 本書の執筆、編集は担当者と協議の上、渡邉が行った。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第３節　調査の経過 …… 3
　第２節　調査組織 …… 4

第Ⅱ章　遺跡の環境
　第１節　地理的歴史的環境 …… 5
　第２節　葛原遺跡の概要 …… 7

第Ⅲ章　調査の内容
　第１節　調査の概要 …… 8
　第２節　遺構と遺物 …… 8
　　１）　竪穴住居跡…… 8
　　２）　竪穴状遺構……19
　　３）　溝……20
　　４）　土坑……22
　　５）　柱穴……24

第Ⅳ章　まとめ ……25

挿　図　目　次

第１図　広域農道日田地区路線図（1/30,000）
第２図　調査区位置図（1/3,000）
第３図　遺跡分布図（1/20,000）
第４図　葛原遺跡調査区位置図（1/5,000）
第５図　遺構配置図（1/400）
第６図　調査区東壁土層図（1/80）
第７図　１号竪穴住居跡実測図（1/60）
第８図　１号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3、1/4）
第９図　２号竪穴住居跡実測図（1/60）
第10図　２号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）
第11図　２号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3、1/4）
第12図　３号竪穴住居跡実測図（1/60）
第13図　３号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3、1/4）
第14図　４号竪穴住居跡実測図（1/60）
第15図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3、1/4）
第16図　５号竪穴住居跡実測図（1/60）
第17図　６号竪穴住居跡実測図（1/30）
第18図　６号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）
第19図　７号竪穴住居跡実測図（1/60）
第20図　７号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）
第21図　７号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3、1/4）
第22図　８号竪穴住居跡実測図（1/60）
第23図　８号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3、1/4）
第24図　９号竪穴住居跡実測図（1/60）
第25図　９号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）
第26図　９号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）
第27図　10号竪穴住居跡実測図（1/60）
第28図　10号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）
第29図　11号竪穴住居跡実測図（1/60）
第30図　11号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）
第31図　12号竪穴住居跡実測図（1/60）
第32図　12号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

第33図　12号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）
第34図　13号竪穴住居跡実測図（1/60）
第35図　13号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）
第36図　１号竪穴状遺構実測図（1/60）
第37図　２号竪穴状遺構実測図（1/60）
第38図　３号竪穴状遺構実測図（1/60）
第39図　１、２、３号竪穴状遺構出土遺物実測図（1/3、1/4）
第40図　１号溝実測図（1/80）
第41図　２号溝実測図（1/80）
第42図　３号溝実測図（1/80）
第43図　１、３号溝出土遺物実測図（1/4）
第44図　１、２、３号土坑実測図（1/40）
第45図　４号土坑実測図（1/40）
第46図　土坑出土遺物実測図（1/3、1/4）
第47図　柱穴出土遺物実測図（1/4）

図　版　目　次

図版１　①　遺構検出状況（南から）
②　調査区全景（真上から）
図版２　①　調査区中央部（真上から）
②　１号竪穴住居跡
③　２号竪穴住居跡
④　２号竪穴住居跡カマド
⑤　３号竪穴住居跡
図版３　①　４号竪穴住居跡
②　５号竪穴住居跡
③　６号竪穴住居跡
④　７号竪穴住居跡
⑤　８号竪穴住居跡
⑥　８号竪穴住居跡遺物出土状況
⑦　９号竪穴住居跡
⑧　10号竪穴住居跡
図版４　①　10号竪穴住居跡火床面
②　11号竪穴住居跡
③　12号竪穴住居跡
④　12号竪穴住居跡遺物出土状況
⑤　13号竪穴住居跡
⑥　１号竪穴状遺構
⑦　２号竪穴状遺構
⑧　３号竪穴状遺構
図版５　①　１号溝
②　１号溝土層
③　２号溝
④　３号溝
⑤　１号土坑
⑥　２号土坑
⑦　３号土坑
⑧　４号土坑
図版６　出土遺物①
図版７　出土遺物②
図版８　出土遺物③

本文写真目次

写真１　機械作業風景
写真２　作業風景
写真３　調査区東壁土層

表　目　次

表１　広域農道発掘調査遺跡一覧
表２　観察表

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査にいたる経過

本遺跡の発掘調査は大分県日田地方振興局の委託を受けて、県営広域営農団地農道整備事業日田地区に伴って行ったものである。この県営広域営農団地農道整備事業（以下、広域農道）日田地区は、昭和56年に事業計画決定され、天瀬町から大山町を経由して九州横断自動車道日田Ⅰ．Ｃへ通じる道路網を整備し、大規模生産機構を確立し、大型機械の促進、労力の削減、集出荷の一元化、運搬のスピード化、荷痛みの防止等、大きく地域農業の振興に寄与することを目的に進められてきた。実施区間は熊本県小国町から大分県日田市を結び、県内総延長28.073㎞のうち、日田市内8.103㎞にあたる。

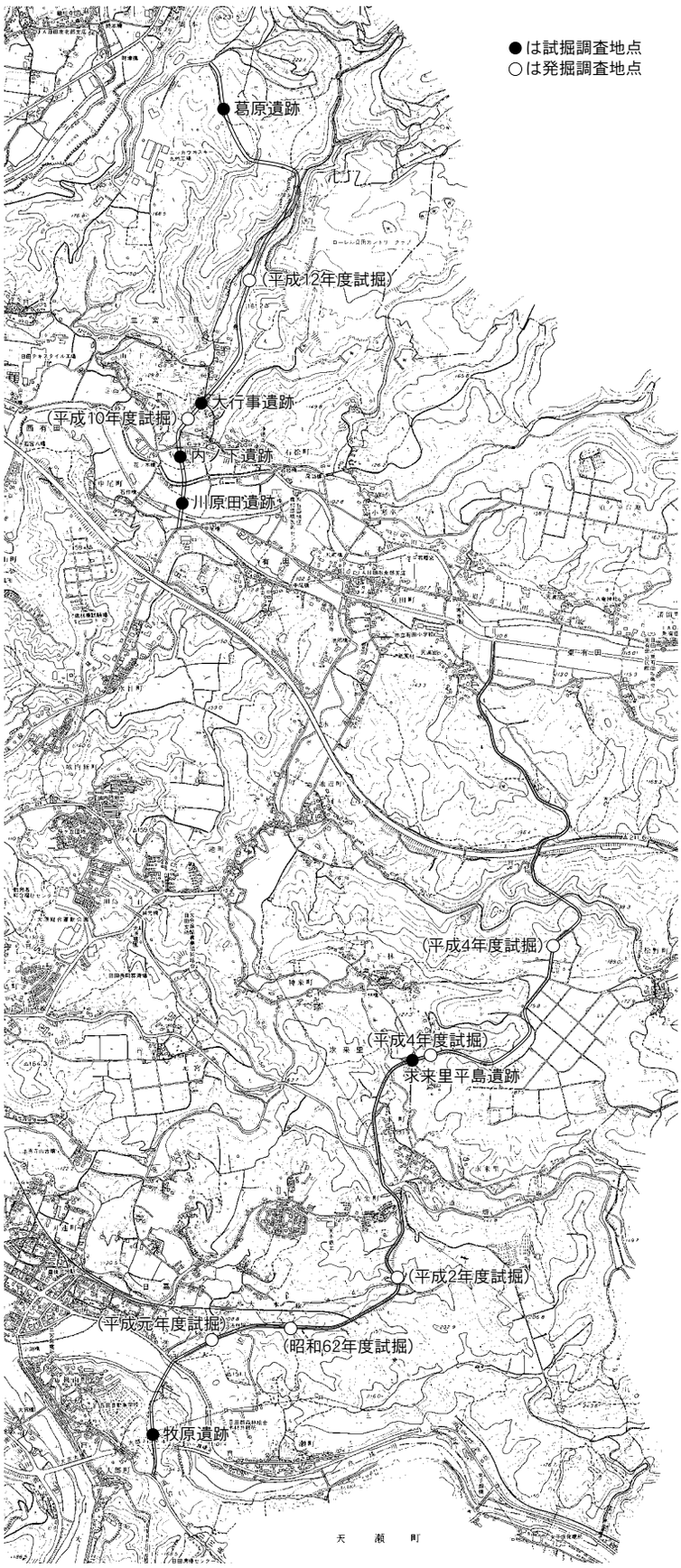
事業の工事実施に伴い、昭和62年度に建設主管課である大分県日田地方振興局耕地課より市教委に対して埋蔵文化財の有無についての照会文書が提出されるようになり、これを受けて協議がなされ、事業の進捗にあわせて随時、事前の試掘調査及び発掘調査を実施してきた。平成５年度には求来里平島遺跡の発掘調査を実施し、縄文時代後期から晩期の竪穴住居跡、古墳時代中期から後期にかけての竪穴住居跡、土坑などが検出された。また、同年度に、工事実施予定地のうち、周知遺跡にあたる大部遺跡と千人塚２号墳の所在する部分に関して、路線や工法の変更などの協議を行い、路線内の一部をトンネル工法とすることになった。翌平成６年度には塚の周溝が一部路線にかかることを考慮し、掘削予定地を対象とした発掘調査と合わせて、確認調査を実施した。調査区からは古墳時代前期の方形周溝墓、石棺墓、木棺墓、土壙墓などが検出され、また、千人塚２号墳は確認調査の結果、中世の塚であることが判明した。なお、この際に調査の行われた部分に関しては、周知遺跡名は大部遺跡の範囲内に属するものの、調査区を適切に判断できるように牧原遺跡と名称を変更し、千人塚２号墳は牧原千人塚に名称変更を行った。

さて、この広域農道は、平成６年度には有田町までで一旦路線を打ち切り（日田工区）、新たに石松町から財津町へ抜ける路線計画（有田工区）の変更が行われた。この変更に伴って日田地方振興局耕地課から平成９年度には有田工区における埋蔵文化財所在の有無についての照会文章が市教育委員会に提出されるようになり、これを受けて、事業の進捗に合わせて随時、事前の試掘調査及び発掘調査を実施してきた。平成10年度には川原田遺跡、内ノ下遺跡の発掘調査を実施し、川原田遺跡では中世の墓や掘立柱建物などが検出され、内ノ下遺跡遺跡では弥生時代の竪穴住居跡、溝、土坑、中世の溝などが検出された。平成12年度には大行事遺跡の発掘調査を行い、古墳時代～古代の住居跡群、掘立柱建物などが検出された。

第１表　広域農道発掘調査遺跡一覧

	遺跡名	調査年度	調査面積	調査担当者	備考
1	求来里平島遺跡	平成５年度	530㎡	土居和幸･行時志郎	報告済
2	牧原遺跡	平成６年度	2150㎡	松下桂子	報告済
3	川原田遺跡	平成10年度	360㎡	吉田博嗣	報告済
4	内ノ下遺跡	平成10年度	1600㎡	吉田博嗣	報告済
5	大行事遺跡	平成12年度	450㎡	渡邉隆行	報告済
6	葛原遺跡Ｊ区	平成13年度	920㎡	渡邉隆行	本報告

その後、有田工区の最終地点にあたる市道葛原線との取り付け部分近辺において平成12年度に試掘調査を実施した結果、遺跡の存在が確認されたことから、この遺跡の取り扱いについて県振興局耕地課と市教委で協議を行うこととなった。この事前協議では現状での保存が難しく、平成14年度が事業の実施最終年度になることもあり、工事を急ぐ状況下にあったことから、平成13年度に本格的な発掘調査を実施することとなった。そこで、平成13年８月１日に葛原遺跡発掘調査に関する委託契約書を取り交わし、同年８月２日～９月21日まで調査を実施した。



第１図　広域農道日田地区路線図（1/30,000）

《参考文献》

・土居和幸編　『求来里平島遺跡Ｂ・Ｃ区』
日田市埋蔵文化財調査報告書第12集
日田市教育委員会　1995年

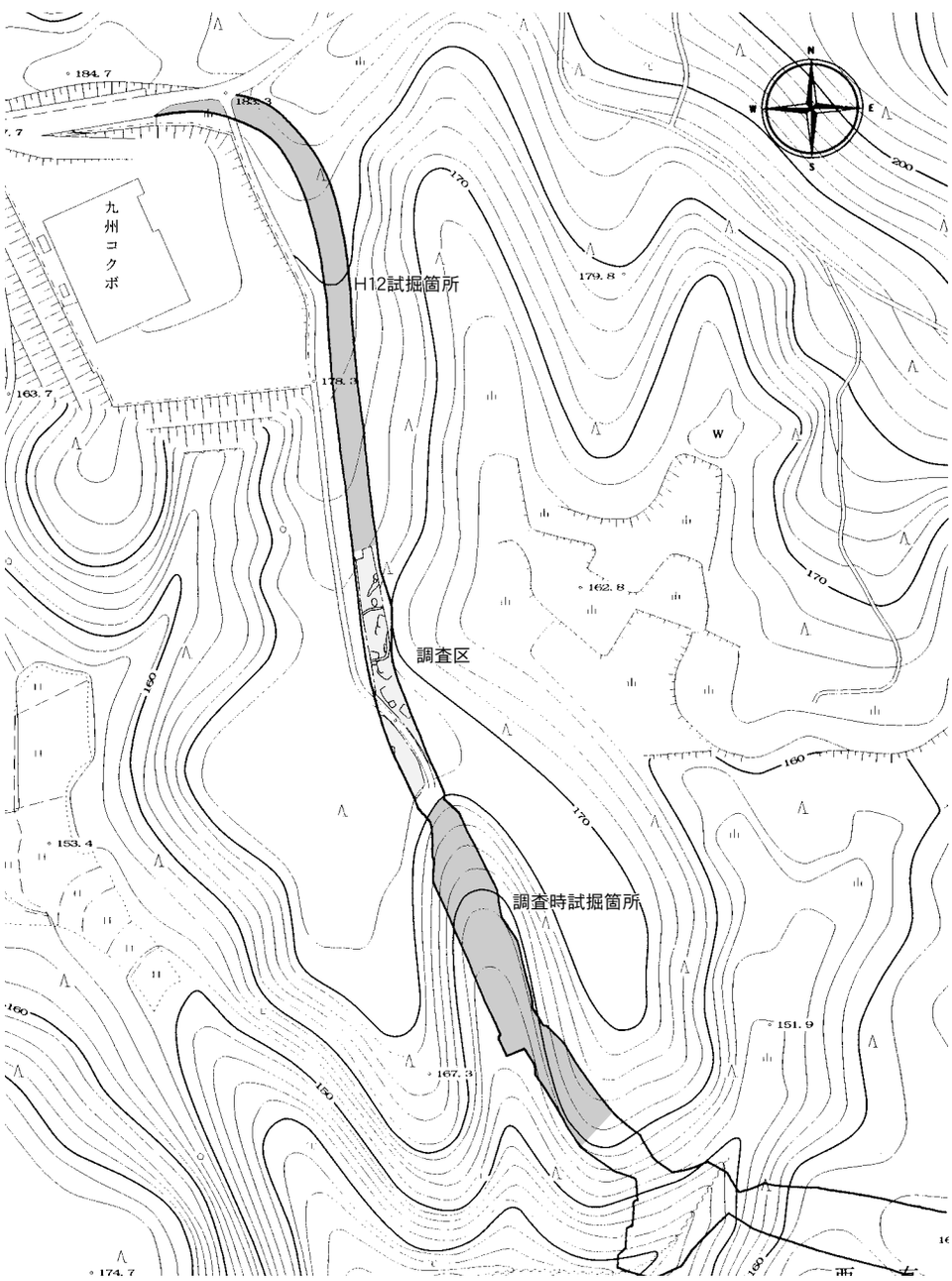
・松下桂子編　『牧原遺跡』
日田市埋蔵文化財調査報告書第12集
日田市教育委員会　1997年

・吉田博嗣編　『川原田遺跡』
日田市埋蔵文化財調査報告書第32集
日田市教育委員会　2001年

・吉田博嗣・渡邉隆行編　『内ノ下遺跡・大行事遺跡』
日田市埋蔵文化財調査報告書第33集
日田市教育委員会　2002年

第２節　調査の経過

調査は平成13年８月２日から開始した。事前に行った試掘調査を踏まえて、丘陵の南側の谷部手前から丘陵頂部までの範囲を調査対象地として設定した。なお、事前調査の行えなかった谷奥の丘陵地に関しては、調査時に確認のため幾つかのトレンチを設定し、機械により掘り下げを行ったが、遺構の存在は確認されなかった。そこで、調査対象地を前述の約900㎡に絞り、表土除去作業を開始した。地山は黄褐色ローム土で、黒褐色の表土を約20㎝ほど除去すると比較的遺構が残存した状況で検出され、北側に行くほど遺構の密度は少なくなった。その後作業員を投入し、遺構検出を開始した。調査前の現況が杉林であったことから、杉の切り株などが残り、その除去作業に多くの時間を費やした。その後、調査は順調に進み、遺構の掘り下げを行った後、９月８日には空中写真撮影を行い、９月21日には全ての遺構実測を終えた後、機材を撤収して調査を完了した。また、９月21日には福岡大学小田富士雄先生に現地指導をいただいた。



第２図　調査区位置図（1/3,000）

第３節　調査組織

年度別の調査関係者は以下の通りである。(職名は当時のままとしている。)

(平成13年度)

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　後藤元晴（日田市教育長）

調 査 事 務　原田俊隆（文化課長)、石井英信（同課長補佐兼文化財係長)、島崎誠司（同主査)、園田恭一郎（同主任)、原田恭子（同臨時職員）

調　査　員　行時志郎（文化課主任)、吉田博嗣（同主任)、若杉竜太（同主事試掘担当)、渡邉隆行（同主事、調査担当）

(平成14年度)

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　後藤元晴（日田市教育長）

調 査 事 務　後藤清（文化課長)、田中伸幸（文化財管理係兼埋蔵文化財係長)、園田恭一郎(同主任)、酒井恵（同主事補）

調　査　員　土居和幸（埋蔵文化財係主査)、行時桂子（同主任)、若杉竜太（同主事)、渡邉隆行（同主事）

発掘作業員

諌元クニ子･江藤勝義･五反田静子･後藤孝市･小下　一･財津由太･財津利枝･田中昇･田中伝江･高倉美利･高倉富美子･筒井英治･中島カズ子･中島トミエ･松岡初次･平原知義･本田早苗･本田忠勝･吉永ハルエ･吉永利夫

整理作業員

朝倉真佐子･穴井トヨ子･石田紀代子･伊藤一美･伊藤弘子･井上とし子･宇野富子･鍛冶谷節子･梶原ヒトエ･川原君子･佐藤みち子･坂口豊子･坂本和代･田中静香･中原琴枝･聖川暢子･平川優子･安元百合･和田ケイ子

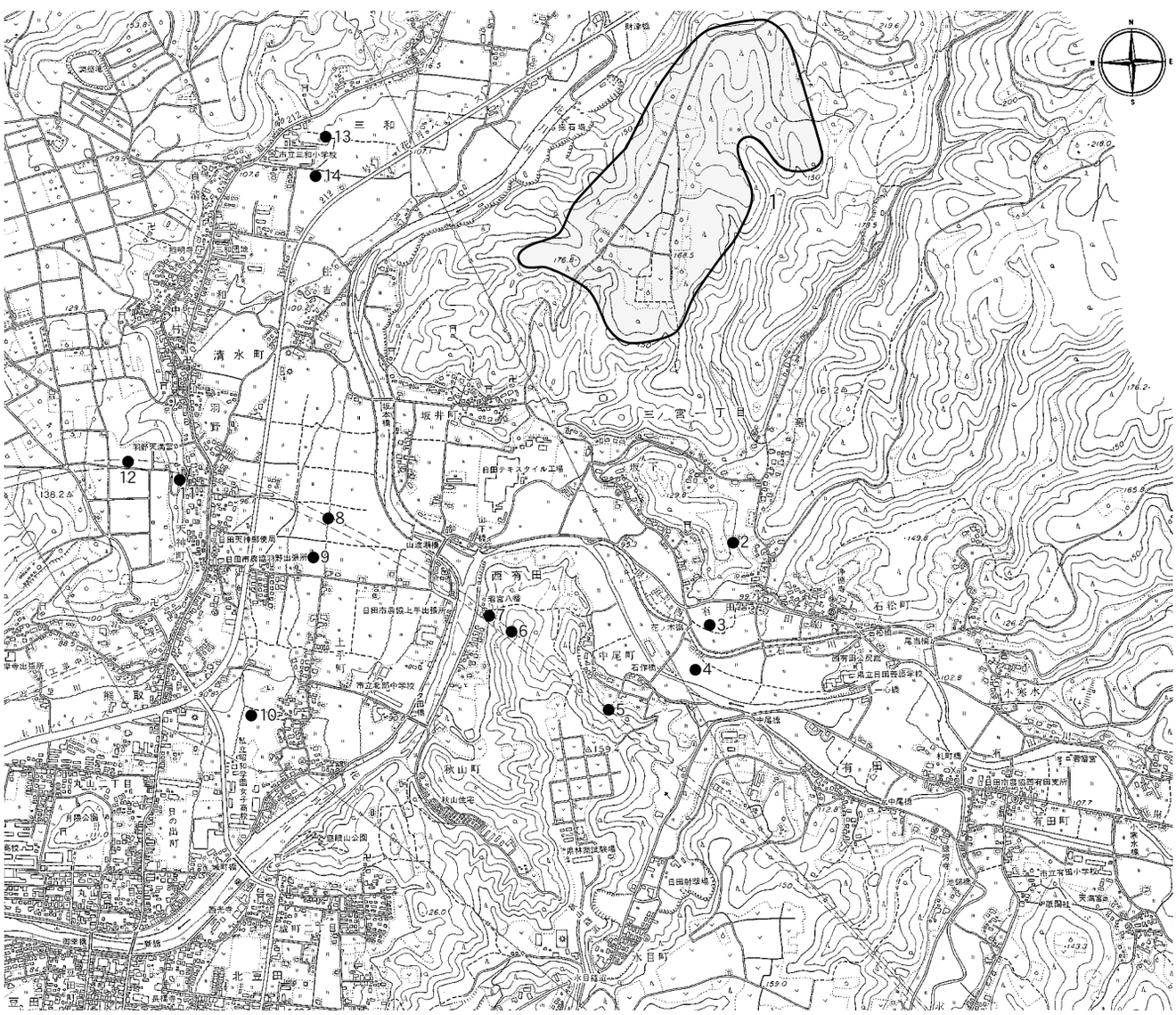
写真１　機械作業風景

写真２　作業風景

第Ⅱ章　遺跡周辺の環境

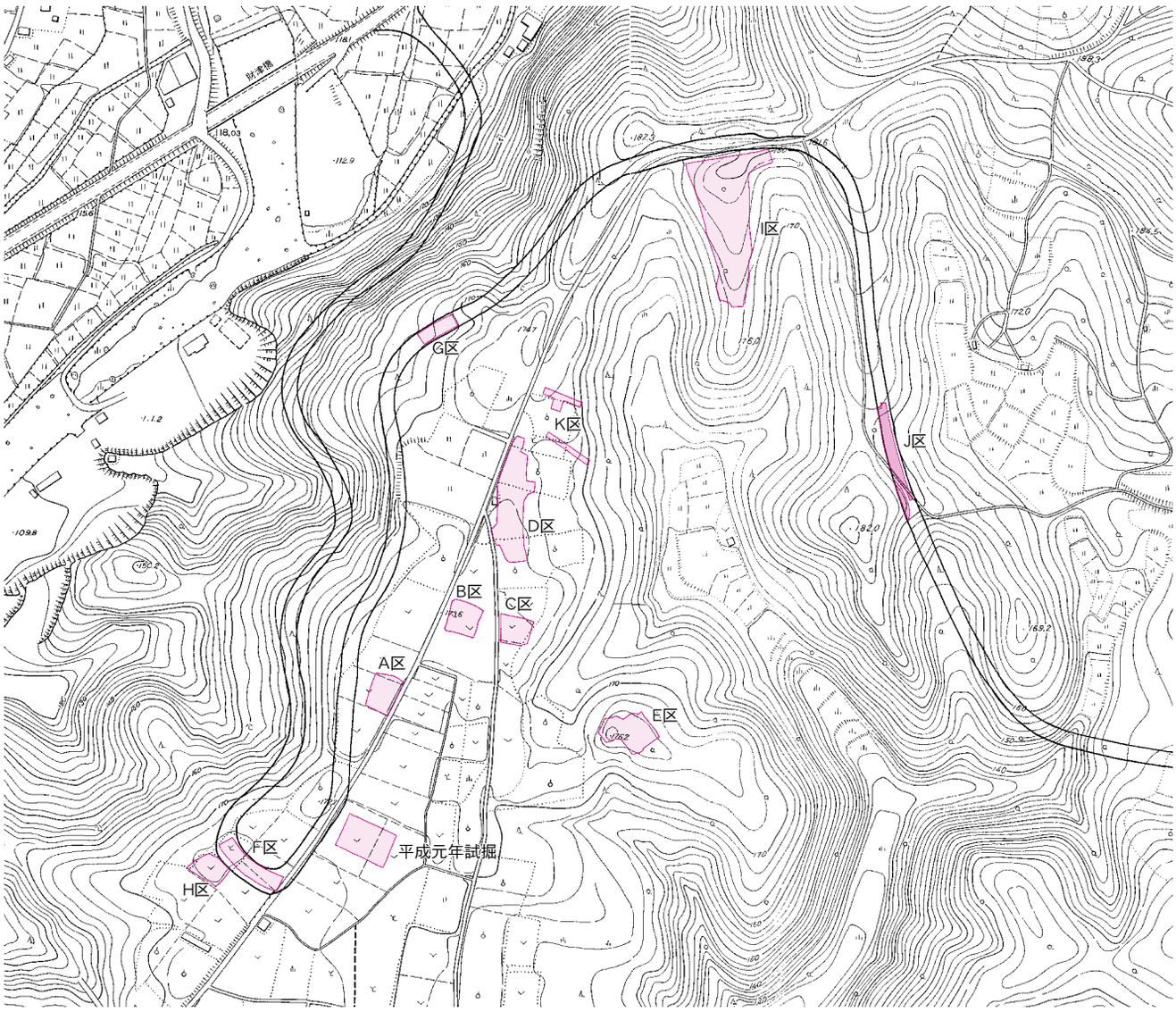
第１節　地理的歴史的環境

葛原遺跡は日田盆地北東部の日田市大字西有田の通称葛ヶ原と呼ばれる標高約170m の台地上に位置する。台地の西側には花月川が、南側には有田川が流れており、台地の南側先端下で合流している。この両河川流域には広範な沖積地が広がっており、台地西側と南側には川を挟んで、山田原台地、佐寺原台地が対峙している。今回の調査地はこの葛原台地東部の尾根上台地の鞍部に位置しており、調査前の現況は杉の生い茂る山林であった。



1．葛原遺跡
2．大行事遺跡、大行事横穴墓群
3．内ノ下遺跡
4．川原田遺跡
5．佐寺原遺跡
6．夕田遺跡
7．夕田横穴墓群
8．日田条里遺跡群
9．日田条里上手地区５次
10. 日田条里上手地区１、２次
11. 羽野横穴墓群
12. 後迫遺跡
13. 三和教田遺跡Ｂ地点
14. 三和教田遺跡Ｃ地点

第３図　遺跡分布図（1/20,000）



第４図　葛原遺跡調査区位置図（1/5,000）

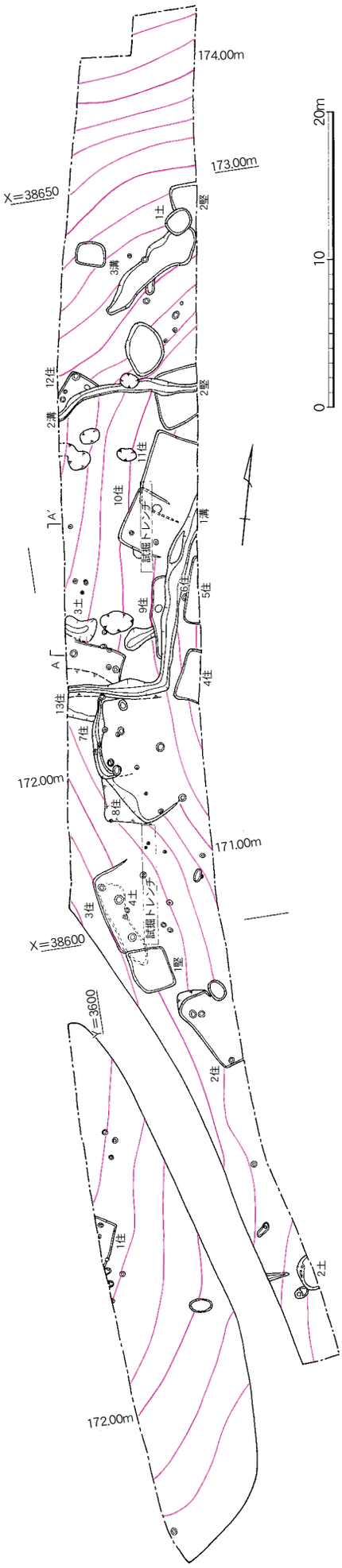
周辺の遺跡を見てみると、花月川を挟んだ沖積地には三和教田遺跡があり、Ｃ地点では縄文時代後期の土偶などが発見された流路など、Ｂ地点では弥生時代後期の環濠集落跡、古墳時代の集落跡、中世の建物跡、また古代の円面硯などが発見され、沖積地においては数少ない、長期間にわたって継続する集落遺跡であることが明らかとなっている（註１）。この沖積地が有田川と合流する付近には古墳時代前期の土坑などが発見されており、その周辺部には古代から中世の建物群が発見された日田条里上手地区が所在する（註２）。また、花月川を挟んだ対岸の山田原台地上には弥生時代の拠点集落である後迫遺跡（註３）があり、有田川を挟んだ対岸の佐寺原台地上にも弥生時代の拠点集落である佐寺原遺跡（註４）がある。また、これらの台地の斜面には、それぞれ、古墳時代の集団墓である羽野横穴墓群、夕田横穴墓群（註５）が展開している。台地の北東奥では、縄文時代の包含層、古墳時代の集落跡などが発見された西有田赤ハゲ遺跡（註６）があり、葛原遺跡を含むこの台地の奥に至るまで生活の痕跡が認められる。台地を挟んだ東側の沖積地には中世の土壙墓が発見された川原田遺跡（註７）、弥生時代の溝や中世の溝などが発見された内ノ下遺跡（註８）などがあり、その周辺の緩斜面からは古墳時代から古代の集落跡が発見された大行事遺跡（註８）があり、この遺跡周辺の台地斜面には大行事横穴墓群が展開している。

第２節　葛原遺跡の概要

これまで、この葛原台地周辺では６回の調査を実施している（第４図）。昭和62年には工場の建設に伴い、工場造成地（Ａ区～Ｅ区）及び、その取り付け道路となる市道（Ｆ・Ｇ区）を調査しており、弥生時代、及び古墳時代の集落跡が検出されている（註９）。また、平成元年には工場建設に伴い試掘調査を実施し、集落跡が検出されている（註10）。平成６年にはポンプ場建設（Ｈ区）に伴い発掘調査を実施し、弥生時代の集落跡が検出され（註11）、平成８年には工場建設（Ｉ区）に伴い発掘調査を実施し、縄文時代の竪穴住居跡などが検出されている（註12）。また、平成13年には駐車場造成（Ｋ区）に伴い試掘調査を実施し、集落跡が検出されている（註13）。また、Ａ～Ｅ区の北東には葛原古墳が所在している。このように、これまでの調査結果から、葛原台地上での古代の歴史が解明されつつある。さて、今回の調査はこのうち、葛原遺跡のＪ区にあたり、Ａ～Ｈ区と小さな谷を一つ挟み、Ｉ区の南東にあたる。

《参考文献》

註１　土居和幸　「三和教田遺跡Ｂ地点」『平成６年度（1994年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1996
吉田博嗣編　「三和教田遺跡Ｃ地点」　大分県文化財調査報告書第98集　大分県教育委員会　1998
註２　友岡信彦編『日田条里遺跡群』九州横断道関係発掘調査報告書（6）大分県教育委員会　1997
吉田博嗣編『日田条里上手地区』日田市埋蔵文化財調査報告書第21集　日田市教育委員会　2000
若杉竜太編『日田条里上手地区５次』日田市埋蔵文化財調査報告書第31集　日田市教育委員会　2001
行時志郎編『日田条里上手地区Ⅲ』日田市埋蔵文化財調査報告書第34集　日田市教育委員会　2001
註３　若杉竜太編『後迫遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第35集　日田市教育委員会　2002
友岡信彦編『後迫遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（18）大分県教育委員会　2001
註４　友岡信彦編　『佐寺原遺跡』九州横断道自動車関係埋蔵文化財調査報告書（9）大分県教育委員会　1998
註５　友岡信彦編　『夕田遺跡群』九州横断道自動車関係埋蔵文化財調査報告書（9）大分県教育委員会　1998
註６　行時志郎編　『西有田赤ハゲ遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第８集　日田市教育委員会　1992
註７　吉田博嗣編　『川原田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第32集　日田市教育委員会　2001年
註８　吉田博嗣･渡邉隆行編　『内ノ下遺跡･大行事遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第33集　日田市教育委員会　2002年
註９　土居和幸･行時志郎編　『平成４年度（1992年度）日田市埋蔵文化財年報』　日田市教育委員会　1994
土居和幸編　『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ』　日田市教育委員会　1988
註10「昭和63年度文化財保護事業概要」『日田文化』33号　日田市教育委員会　1990
註11　永田裕久編　『平成６年度（1994年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1996
註12　土居和幸編　『平成８年度（1996年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1998
註13　若杉竜太編　『平成13年度（2001年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2002



第５図　遺構配置図（1/400）

第Ⅲ章　調査の内容

第１節　調査の概要（第５、６図）

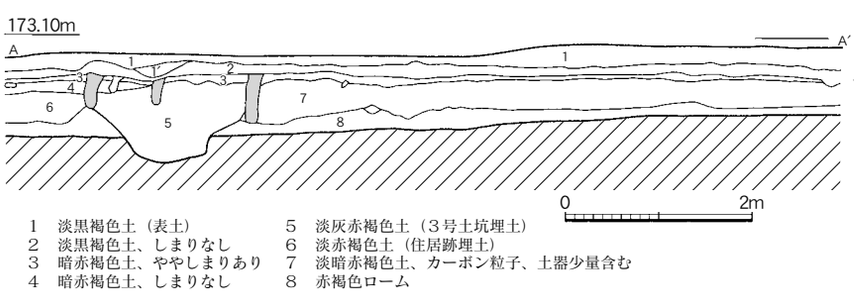
調査区内から検出された地山は黄褐色ローム層であり、この上面には暗褐色土の層があり、これが古墳時代の土器を含む包含層になるものと思われる。調査区の中ほどに見られる緩やかな谷地には淡暗赤褐色土の包含層があり、緩やかに谷地に流れ込んだ縄文時代の包含層になるものと思われる。遺構の埋土はそのほとんどが暗褐色土であり、一部の遺構では淡褐色土の埋土になっている。調査区から検出された遺構は竪穴住居跡13軒、竪穴遺構３基、溝３条、土坑４基、ピット多数である。以下それぞれについて説明を加える。

第２節　遺構と遺物

１）　竪穴住居跡

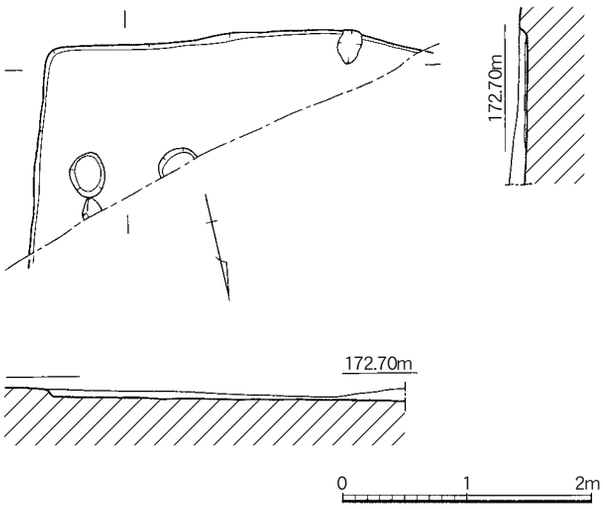
１号竪穴住居跡（第７図、図版２）

調査区南側より検出された遺構で、大部分が調査区外にかかっているためその全容は把握できないが、角が検出されており、床面が比較的平たいことから方形の竪穴住居跡であると考えられる。主柱穴、カマドは検出されなかった。検出面までの深さは約10㎝を測る。

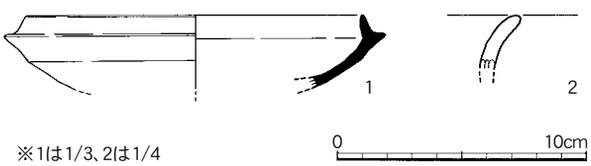


第６図　調査区東壁土層図（1/80）

写真３　調査区東壁土層

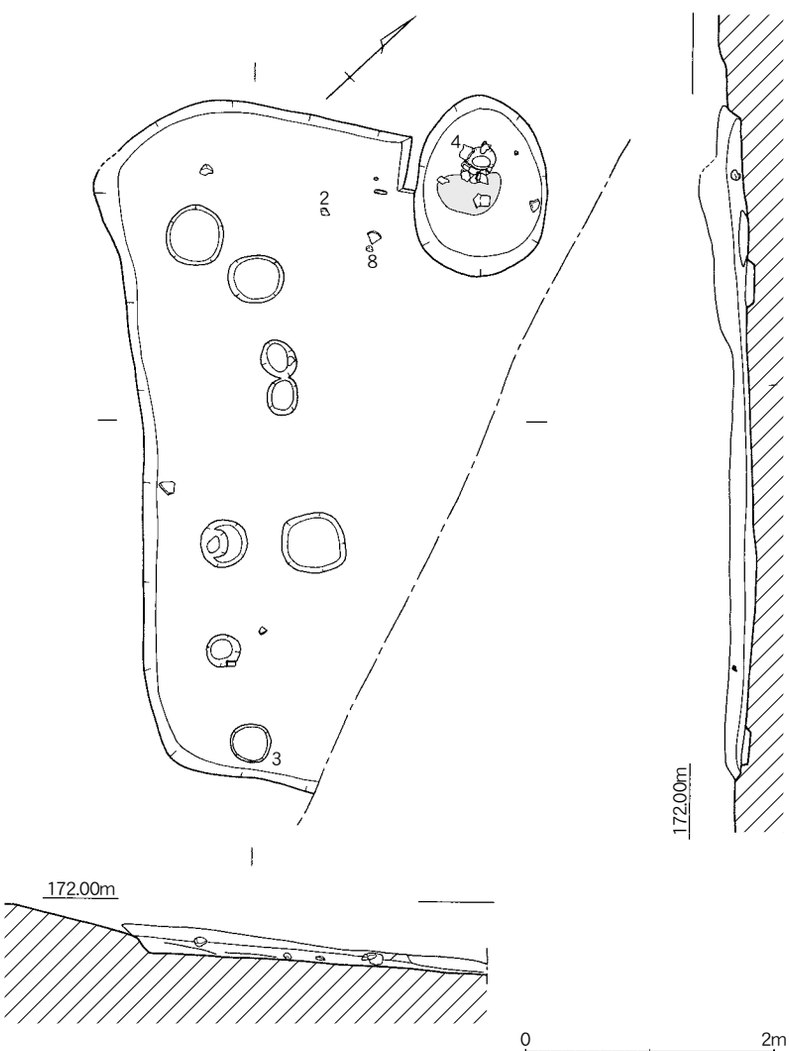


第７図　１号竪穴住居跡実測図（1/60）



※1は1/3、2は1/4

第８図　１号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3、1/4）



第９図　２号竪穴住居跡実測図（1/60）

１号竪穴住居跡出土遺物（第８図）

１は須恵器杯身である。明瞭なかえりを持ち、受け部はやや内傾しながら上方に伸びる。内外ともに回転ナデが施される。２は土師器甕である。緩やかに外反する。内外ともにナデ調整である。

２号竪穴住居跡（第９、10図、図版２）

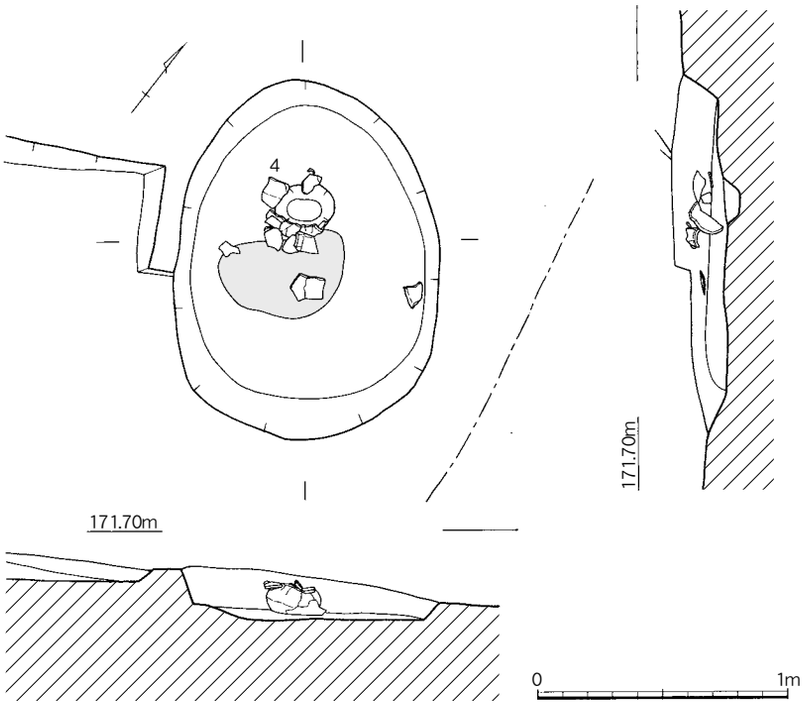
調査区南側で検出された遺構で、東半分は調査区外にかかっている。カマドは確認面での規模は南西方向で約5.5m、床面までの深さ約20cmを測り、方形プランを呈する。床面に掘り込まれるピットはいくつか検出されたものの、主柱穴は検出されなかった。

カマドは北側に付設されており、住居跡の外にやや張り出し、片袖が残存していた。床面をやや窪ませており、床面中央付近には被熱により赤褐色に変色した硬化面が確認された。硬化面のやや奥には支脚の抜取り痕が確認されたものの、袖石の抜取り痕は確認できなかった。

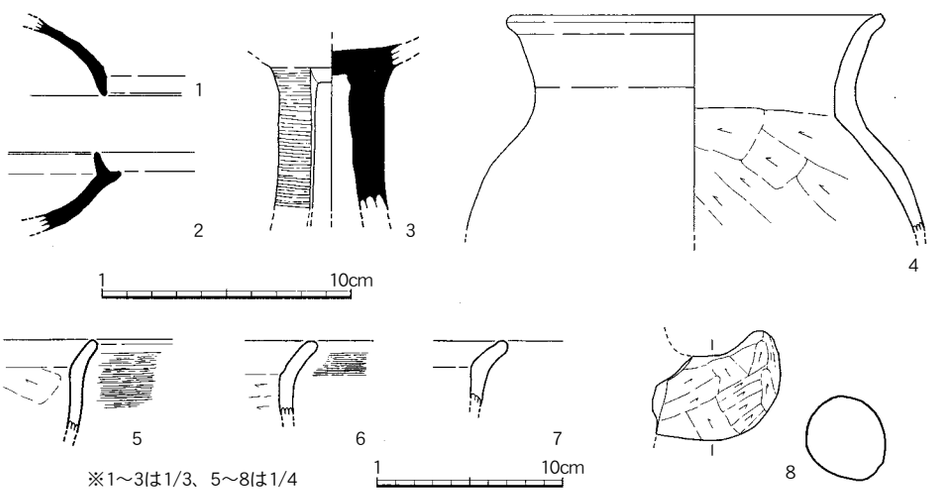
２号竪穴住居跡出土遺物

（第11図）

１は須恵器坏蓋である。口縁部付近にてやや下方に折り曲げながら外反する。調整は内外ともに回転ナデである。２は須恵器杯身である。明瞭なかえりを持ち、受け部はやや内傾する。内外共に回転ナデが施される。３は須恵器高坏の脚部片である。スカシ穴が２穴施される。外面にはカキ目、内面はナデ調整である。４は土師器甕である。緩やかに頸部は屈曲し、口縁部は外販し、端部に平坦面つくり、若干肥厚させる。外面



第10図　２号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第11図　２号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3、1/4）

にはナデ、内面には頸部にかけて右上がりのケズリが施される。５は土師器鉢もしくは、広口壺の破片か。外面には横ハケ、内面にはケズリが施される。６、７は土師器甕である。６は口縁部が外反し、外面横ハケ、内面には横方向のケズリが施される。７はやや口縁部が外反する。内外ともにナデ調整である。８は土師器把手である。ケズリにて調整される。

３号竪穴住居跡（第12図、図版２）

調査区南側で検出された遺構で、東半分は削平を受けている。１号竪穴に切られ、４号溝を切る。確認面での規模は東西方向6.1ｍ、深さ約10㎝を測り、長方形を呈する。北壁には一部壁溝が巡る。床面に掘り込まれたピットはいくつか見られたものの、主柱穴になるものは検出されなかった。

カマドは殆どが削平を受けており、硬化面の一部が東側で検出されたことから、カマドは東側に付設されていたものと思われる。支脚、袖石の抜取り痕は検出されなかった。

３号竪穴住居跡出土遺物（第13図）

１、２は須恵器坏蓋である。いずれも口縁部にかけて下方に屈曲し、内面には沈線が巡る。外面はナデが施され、天井部にかけて回転ヘラケズリが施される。内面は回転ナデである。いずれも壁周溝から検出された。３は提瓶である。口縁部は欠損しており、把手部分は一部分が残存する。器壁外面にはカキ目にて調整され、一部ハケ目、タタキ目が残存している。タタキ、カキ目、ハケ目（一部の調整）の順番で調整されたものと思われる。内面には一部カキ目が残り、ハケ及びナデが施されている。４は須恵器鉢である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がりる。内外ともにナデ調整である。５は須恵器高坏である。脚部端部を下方に折り曲げる。内外ともにナデ調整である。６は土師器把手である。ケズリにて調整される。

４号竪穴住居跡（第14図、図版３）

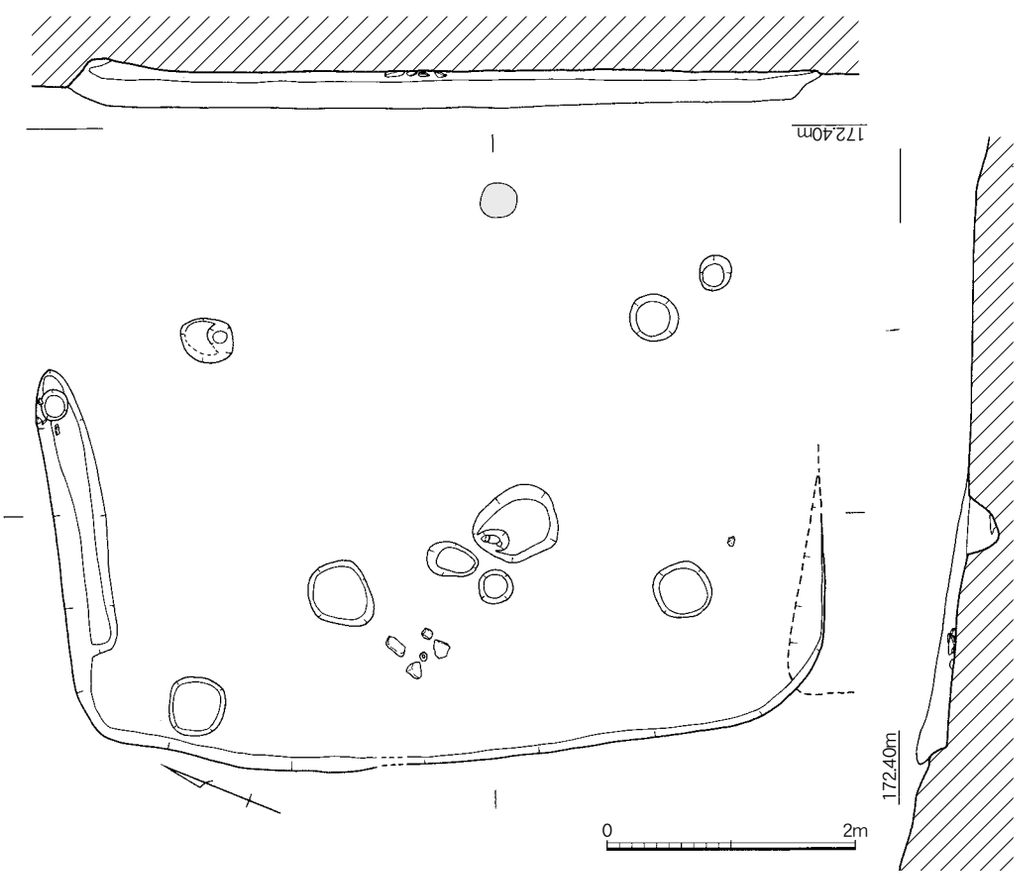
調査区東側にて検出された遺構で、東半分以上が調査区外にかかっている。確認面での規模は南北長約3.5m、深さ約30cmを測り、方形を呈する。床面には一部ピット、土坑が掘り込まれるが、主柱穴になるものは検出されなかった。

４号竪穴住居跡出土遺物（第15図）

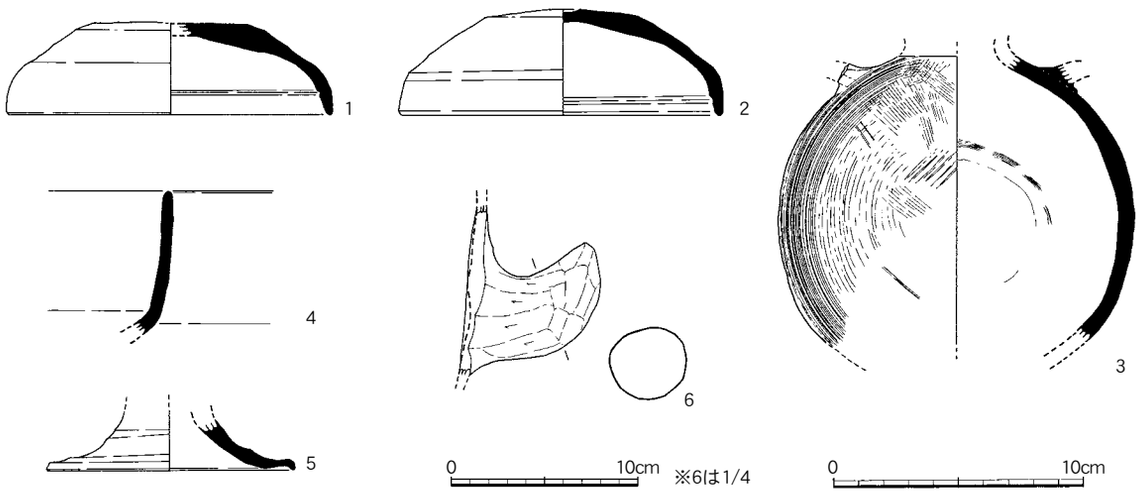
１は須恵器坏蓋である。口縁部は下方にさがり、内面には稜の退化したものと考えられる浅い段が巡る。調整は内外共に回転ナデである。２は須恵器杯身である。受部は明瞭に作り出さず、口縁部は内傾しつつ緩やかに立ち上がる。調整は内外ともに回転ナデである。３は土師器甕である。内面はケズリにて調整され、緩やかに外傾する。４は土師器甕の口縁で、緩やかに外傾する。

５号竪穴住居跡（第16図、図版３）

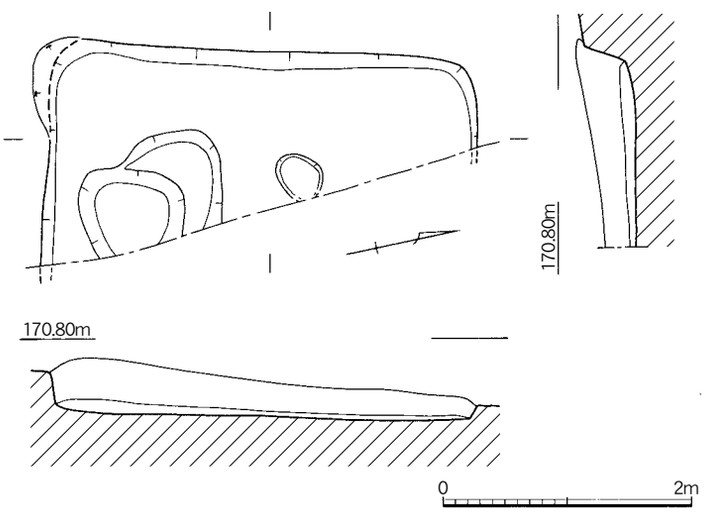
調査区東側にて検出された遺構で、大半が調査区外にかかっている。確認面での規模は南北



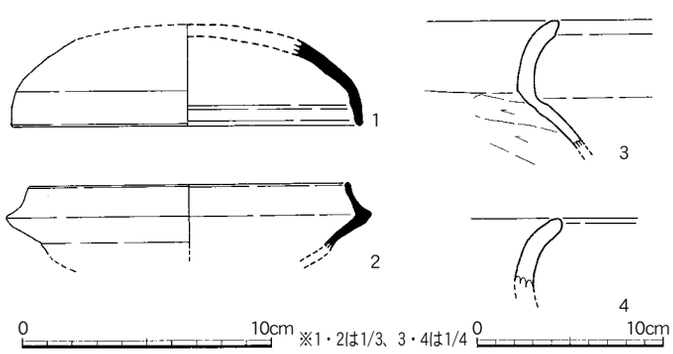
第12図　３号竪穴住居跡実測図（1/60）



第13図　３号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3、1/4）



第14図　４号竪穴住居跡実測図（1/60）



第15図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3、1/4）

長約4.5m、深さ約30㎝を測り、方形を呈する。カマド、主柱穴は検出されなかった。遺物の出土は見られなかった。

６号竪穴住居跡（第17図、図版３）

調査区東側にて検出された遺構で、その大半を５号住居跡に切られており、カマド部分のみが検出できた。なお、このカマドの南西側にも焼土の飛散が認められたことから、あるいはこの方向に煙道があったのかもしれない。袖石、支脚の抜き取り痕は検出できなかった。

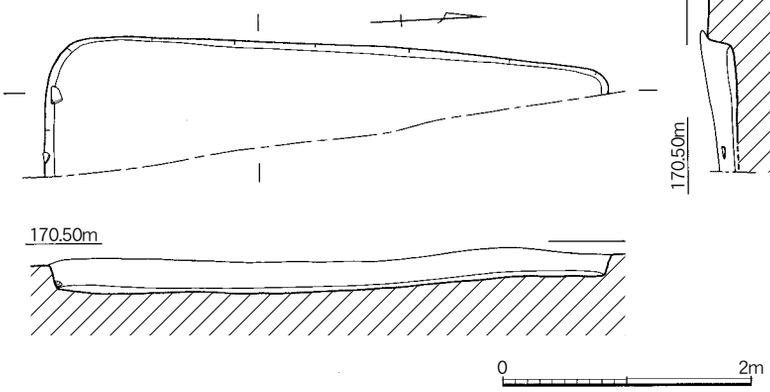
６号竪穴住居跡出土遺物（第18図）

１は須恵器杯身である。火床面直上にて出土した。受け部を明瞭に作り出し、口縁部を内側に内傾させる。内外ともに回転ナデが施され、底面にかけて回転ヘラケズリが施される。

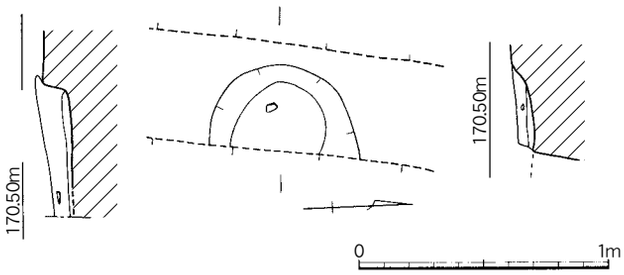
７号竪穴住居跡（第19図、図版３）

調査区中央にて検出された遺構で、７号住居跡を切る。当初、７号住居跡との切り合いを間違えていたため、南側の床面と壁を掘り飛ばしてしまった。確認面での規模は南北長約5.5m、深さ約30㎝を測り、方形を呈する。西側には壁溝が巡り、かなり大きな壁溝で、幅約80㎝を測る。床面にはいくつかのピットが検出されたものの、主柱穴は確認されなかった。

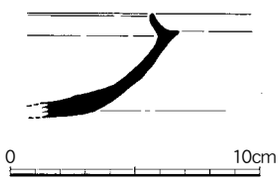
カマドは住居跡南側に作られており、やや住居跡の軸方向とずれている、袖石の抜取り痕と支脚の抜取り痕が検出され、カマド底面の緩やかな落ち込みが検出された。この落ち込みの北側に火床面が見られた。抜き取り痕から推測される袖間の幅は約75㎝、奥壁まで



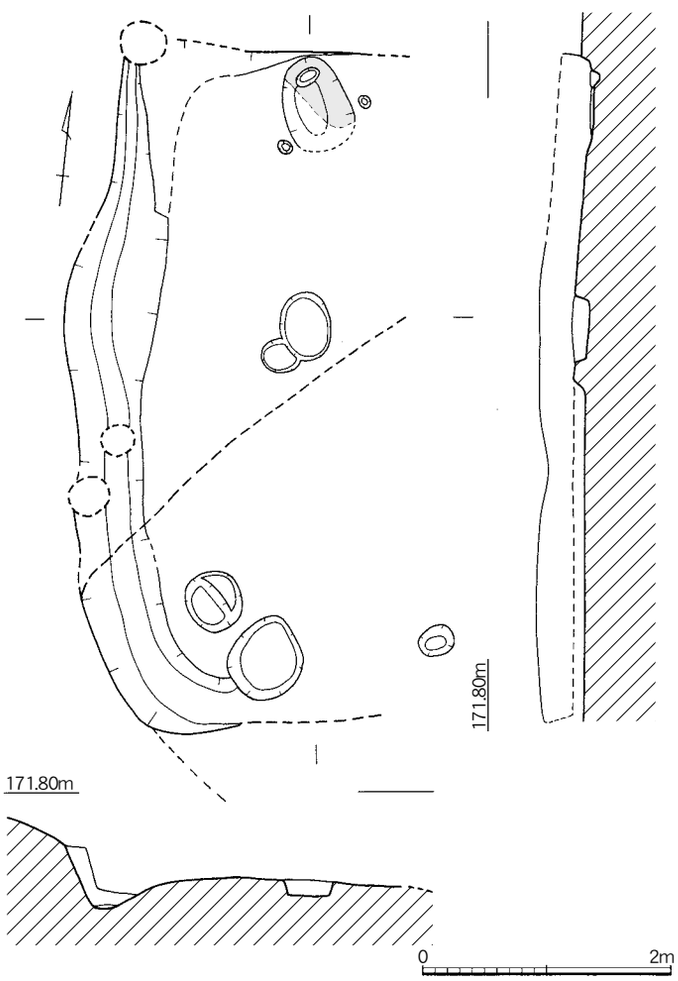
第16図　５号竪穴住居跡実測図（1/60）



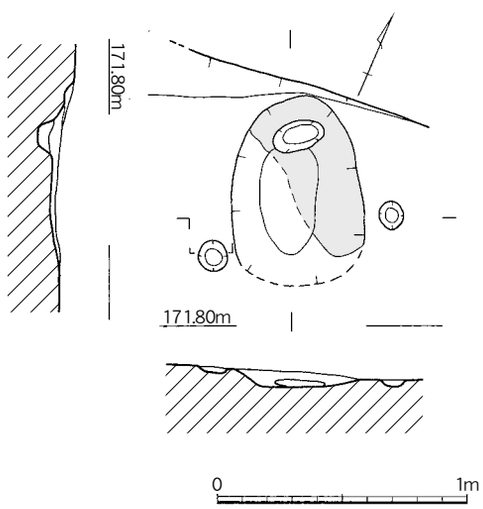
第17図　６号竪穴住居跡実測図（1/30）



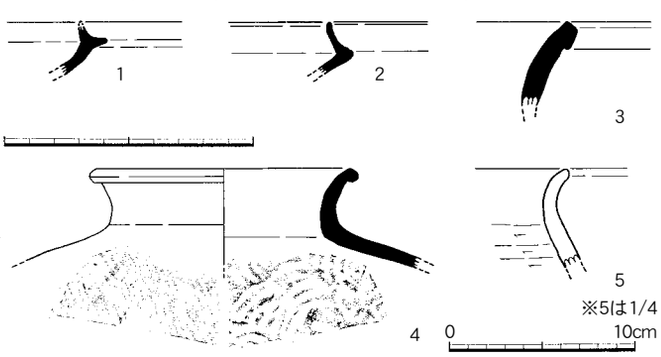
第18図　６号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）



第19図　７号竪穴住居跡実測図（1/60）



第20図　７号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

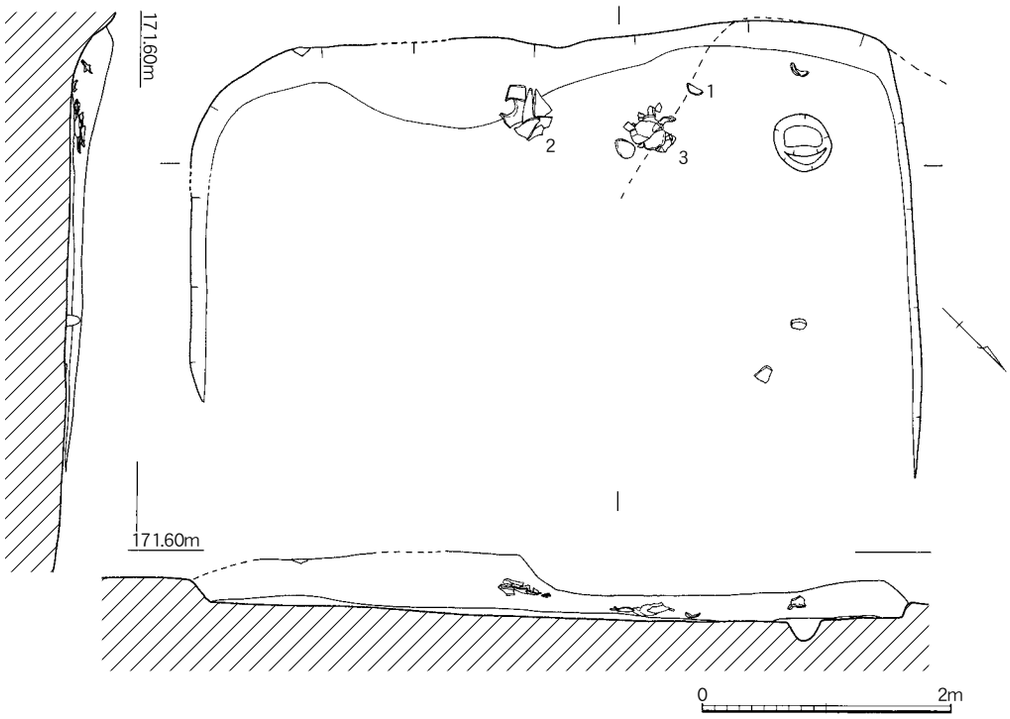


第21図　７号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3、1/4）

の距離は60㎝を測る。

７号竪穴住居跡出土遺物（第21図）

１は須恵器杯身である。受け部を明瞭に作り出し、口縁部は立ち上がる。調整は内外共に回転ナデである。２は須恵器杯身である。受け部を明瞭には作り出さず、口縁部は内傾しながら、立ちあがる。３は須恵器甕である。口縁端部を肥厚させ、肥厚部下部には段を作り出す。内外と



第22図　８号竪穴住居跡実測図（1/60）

もに回転ナデが施される。４は須恵器甕である。口縁部端部をやや幅広く肥厚させ、緩やかに外反させる。頸部は明瞭に屈曲し胴部は大きく張り出す。外面には平行タタキ、内面には青海波状タタキが施される。５は土師器甕である。内面は横方向のケズリにて調整される。

８号竪穴住居跡（第19図、図版３）

調査区中央にて検出された遺構で、８号住居跡に切られる。確認面での規模は約5.7ｍ、深さ約30㎝を測り、方形を呈する。北西壁の一部には壁溝が巡る。主柱穴は確認されなかった。カマドは残存していなかったことから、東側に作りつけられていたのではないかと思われる。

８号竪穴住居跡出土遺物（第23図）

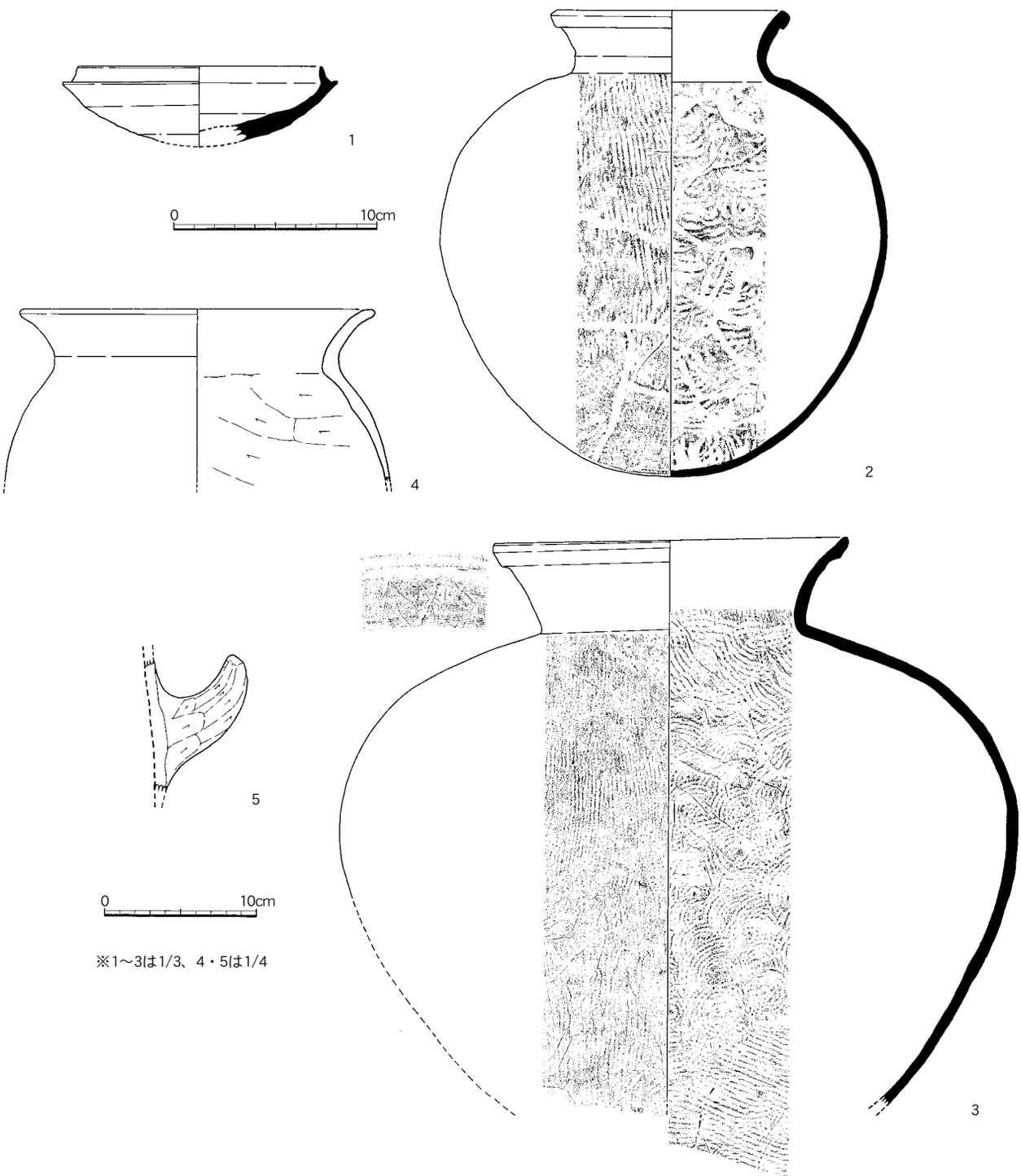
１は須恵器坏身である。受け部を明瞭につくり、口縁部は内傾しながら立ち上がる。内外ともに回転ナデ、外面底面にかけては回転ヘラケズリが施される。２は須恵器甕である。口縁端部を肥厚させ、口縁部や緩やかに外反する。頸部の屈曲は緩やかで、胴部は大きく張り出さない。外面は平行タタキが施され、内面には青海波状タタキが施される。３は須恵器大甕である。端部を肥厚させ、緩やかに外反する。胴部にかけては外面格子目タタキ、内面青海波状タタキが施される。口縁部外面には山形模様のヘラ記号が施される。４は土師器甕である。頸部を明瞭に作り出し、口縁部は緩やかに反りながら外反する。外面はローリングのため不明であるが、内面にはケズリが施される。５は甕、あるいは甑の把手である。把手外面の調整はケズリが施される。

９号竪穴住居跡（第24、25図、図版３）

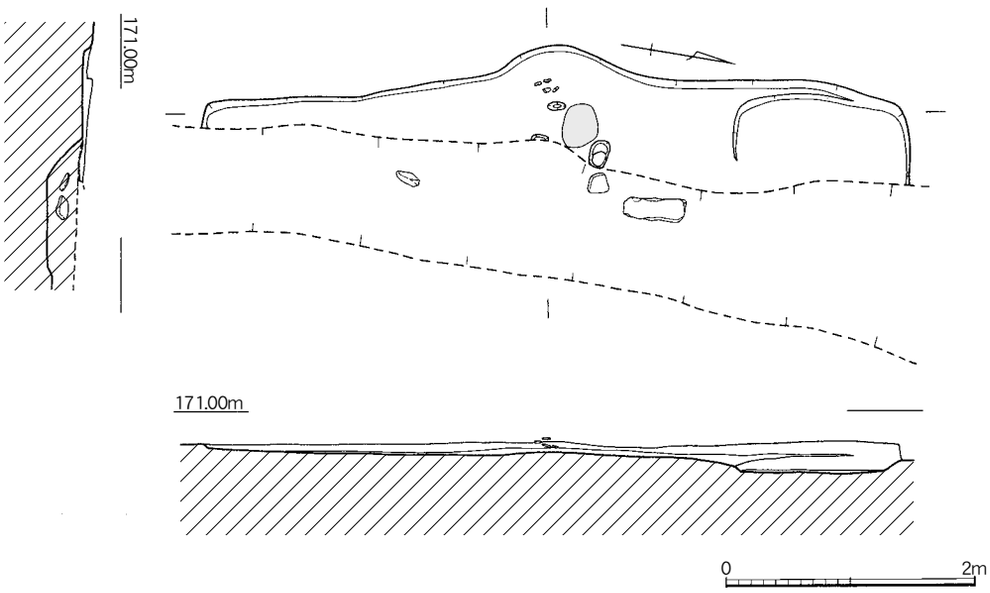
調査区中央にて検出された遺構で、その大半が削平を受けており、住居の中央部分を１号溝に切られている。確認面での規模は、南北長約5.6ｍ、深さ約９㎝を測り、方形を呈する。住居内の北側には、幅約1.3ｍ、深さ約13㎝の屋内土坑が付設されている。主柱穴は確認されな

かった。

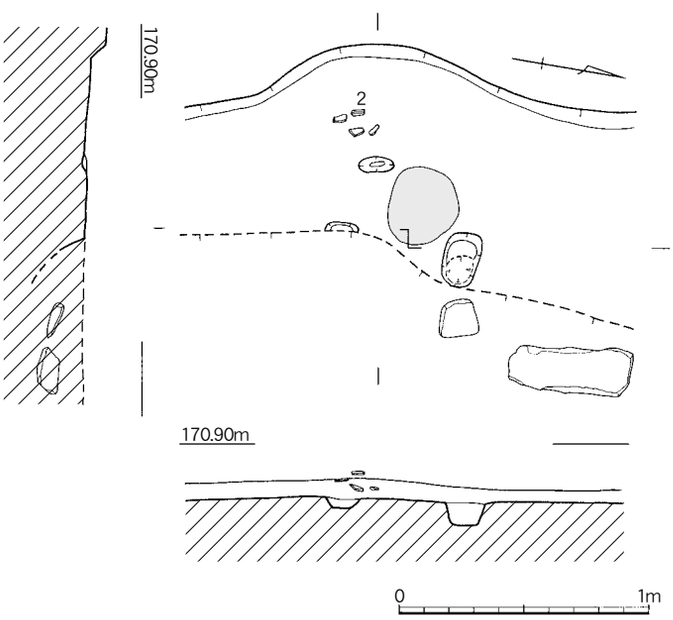
カマドは西側中央に付設されており、やや住居跡外に張り出している。袖は残存しておらず、天井石と袖石に使用されたと考えられる石が、カマド手前の１号溝内より出土したことから、１号溝によって削平を受けた際にカマドが破壊を受けたものと思われる。支脚、袖石の抜取り痕が確認され、推測される袖間の規模は約50㎝、奥壁までの規模は１ｍを測る。火床面はカマド中央よりやや北側にずれた位置より検出された。



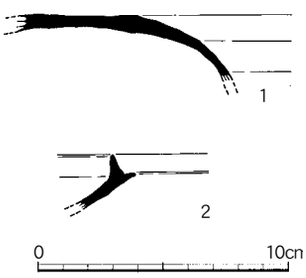
第23図　８号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3、1/4）



第24図　９号竪穴住居跡実測図（1/60）



第25図　９号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第26図　９号竪穴住居跡
出土遺物実測図（1/3）

９号竪穴住居跡出土遺物（第25図）

１は須恵器杯身の口縁部破片である。明瞭に受け部を作り出し、口縁部は内傾しながら立ち上がる。内外ともに回転ナデにて調整される。２は須恵器坏蓋である。内外ともに回転ナデが施される。

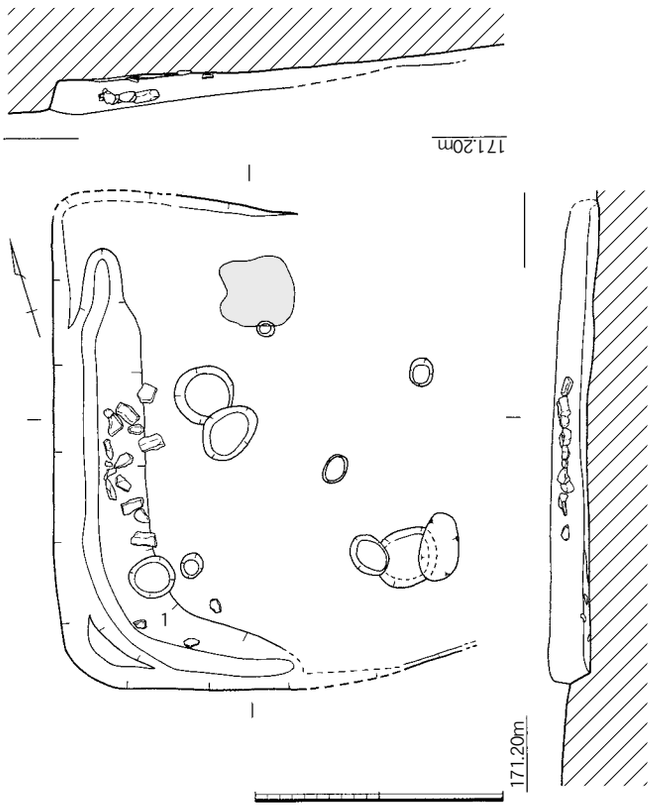
10号竪穴住居跡（第27図、図版３）

調査区北よりにて検出された遺構で、11号住居を切っている。確認面での規模は南北長約3.8m、深さ約20cmを測り、方形を呈する。西側には壁溝が巡る。壁溝周辺には凝灰岩の破片がやや浮いた状態でかたまって廃棄されていた。床面に掘り込まれるピットはいくつか検出されたものの、主柱穴になるものは検出されなかった。

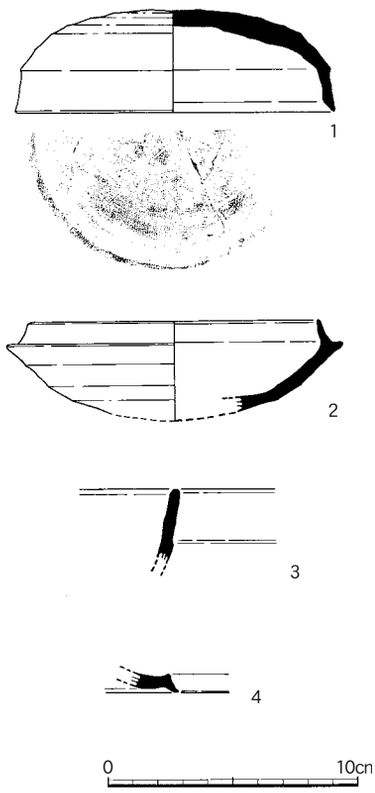
カマドは北側に付設されており、火床面のみが検出された。壁面よりやや離れており、支脚、袖石の抜き取り痕は検出されなかった。

10号竪穴住居跡出土遺物（第28図）

１は須恵器坏蓋の口縁部破片で、天井部から口縁部にかけて、明瞭な屈曲を持ち、口縁部は内側に入る。口唇部は断面三角形を呈し、内面がやや内側にへこむ。天井部にかけて回転ヘラ



第27図　10号竪穴住居跡実測図（1/60）



第28図　10号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

ケズリ、口縁部及び内面には回転ナデが施される。内面にはヘラ記号が施される。２は須恵器杯身で受け部を明瞭につくり、口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。底面にかけて回転ナデが施され、口縁部及び内面にかけて回転ナデが施される。３は壺の口縁部だろうか。口縁部下半に段を持ち、口縁部はやや外反しながら立ち上がる。内外ともに回転ナデが施される。４は須恵器高坏の脚部片である。端部をやや折り曲げ、下方に下げる。内外ともに回転ナデが施される。

11号竪穴住居跡（第29図、図版４）

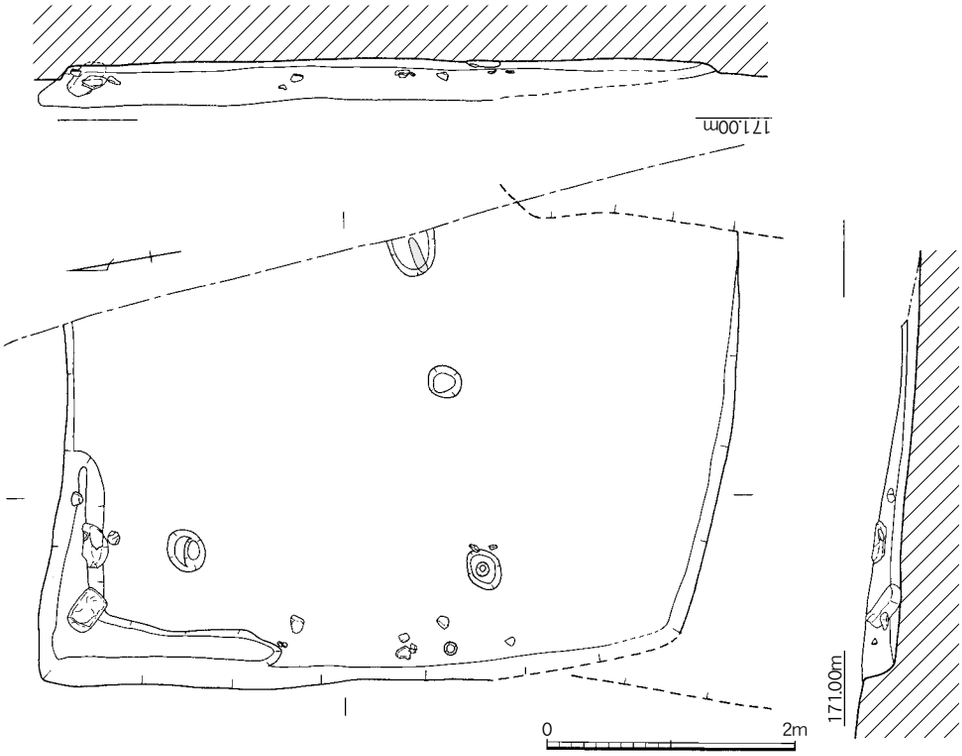
調査区北東にて検出された遺構で、10号住居跡、１号溝に切られている。確認面での規模は約5.4ｍ、深さ約30㎝を測り、方形を呈する。北西側に一部壁周溝が巡る。床面にはいくつかのピットが検出されたものの、主柱穴になるものは見られなかった。カマドは、検出されなかったものの、東側の調査区との境にあたる床面に一部落ち込みがあり、焼土の飛散が確認されたことから、この方向にカマドがあるのではないかと思われる。

11号竪穴住居跡出土遺物（第30図）

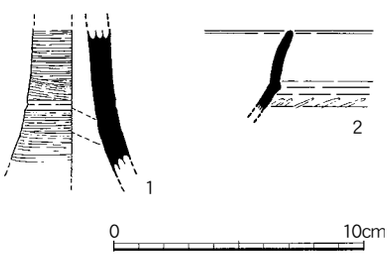
１は須恵器高坏の脚部で、外面には沈線が巡り、脚部にかけて緩やかに開く。外面にはカキ目が施され、内面にはナデ調整が施されるが、一部シボリ痕が見られる。２は須恵器瓹である。口縁部にかけて明瞭な段を形成し、その下部に刺突文が施される。

12号竪穴住居跡（第31、32図、図版４）

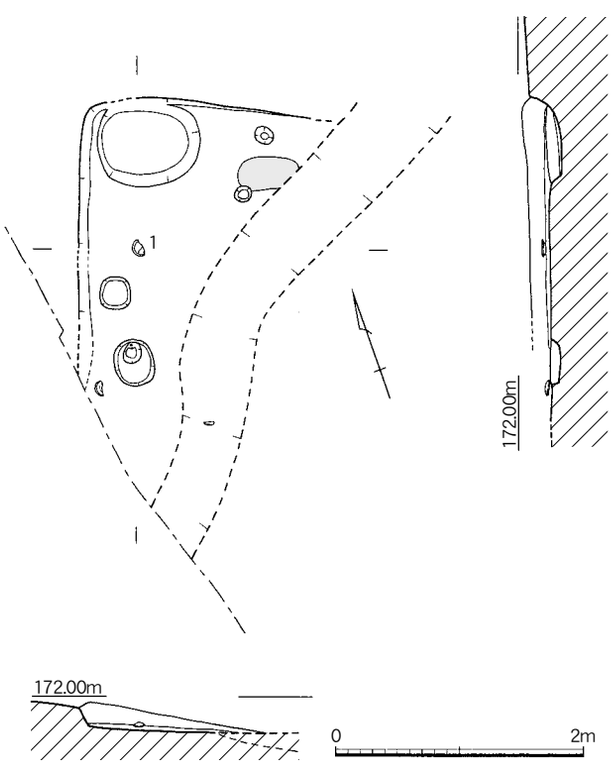
調査区北西にて検出された遺構で、２号溝に切られる。その大半が削平を受けており、北西壁の一部分が検出された。主柱穴は確認されなかったものの、住居跡内の北西側には幅約80㎝、長さ約60㎝、深さ約８㎝の屋内土坑が検出された。



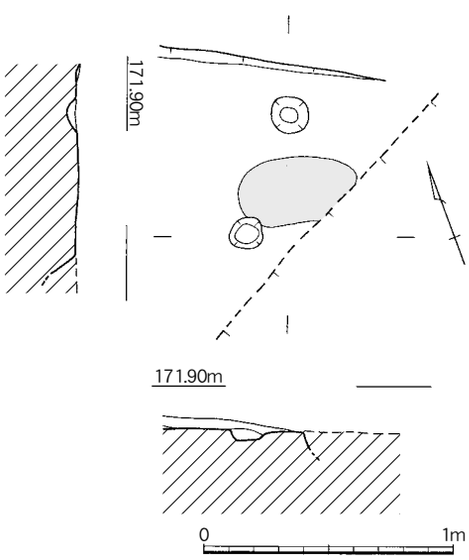
第29図　11号竪穴住居跡実測図（1/60）



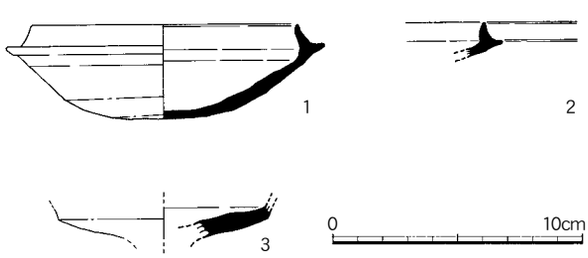
第30図　11号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）



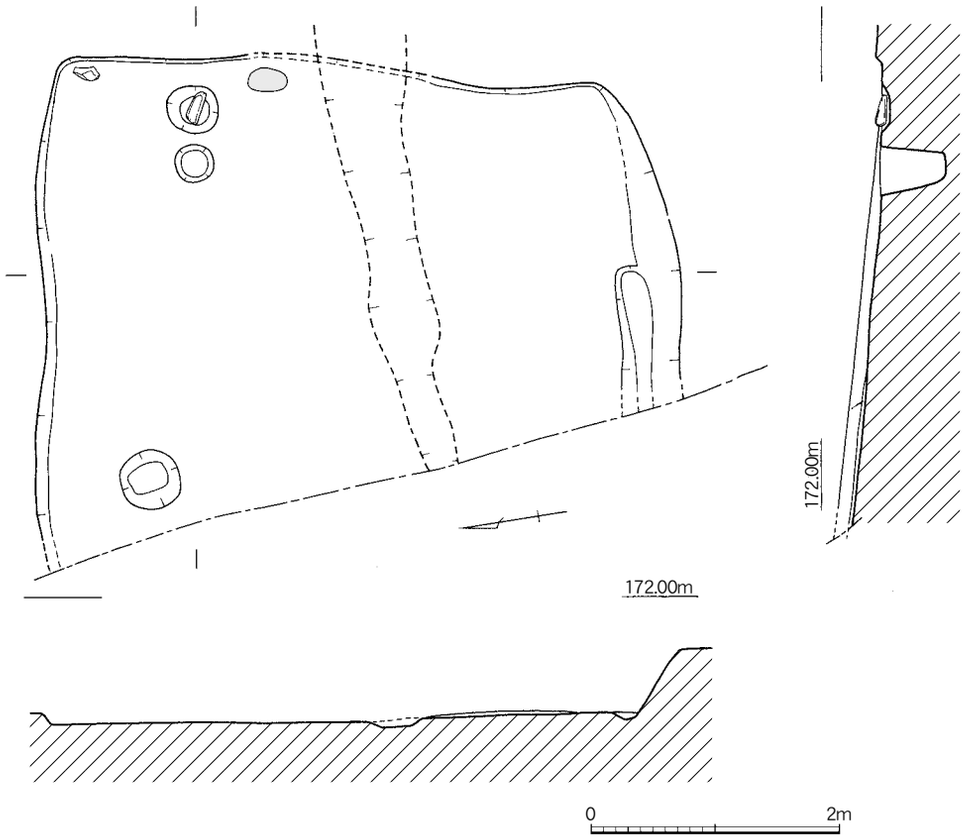
第31図　12号竪穴住居跡実測図（1/60）



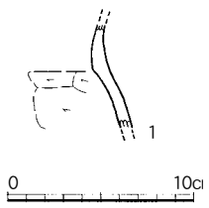
第32図　12号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第33図　12号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）



第34図　13号竪穴住居跡実測図（1/60）



第35図　13号竪穴住居跡
出土遺物実測図（1/4）

カマドは住居跡北側に作られており、支脚、袖石の抜取り痕が確認された。火床面は袖石、支脚のほぼ中央部に見られた。

12号竪穴住居跡出土遺物（第33図）

１は須恵器杯身である。受け部を明瞭に作り出し、口縁部は内傾しながら立ち上がる。天井部にかけて回転ヘラケズリが施され、口縁部及び内面にかけては回転ナデ調整が施される。２は須恵器杯身である。受け部を明瞭に作り出し、口縁部は内傾しながら立ち上がる。３は須恵器高坏である。口縁部にかけて明瞭な屈曲部を作り出す。外面は回転ヘラケズリにて調整され、内面は回転ナデで調整される。

13号竪穴住居跡（第34図、図版５）

調査区中央で検出された遺構で、８号竪穴住居跡、１号溝に切られる。確認面での規模は南北長約8.1ｍ、深さ約10㎝を測る。南壁の一部に周溝が巡る。主柱穴、カマドは確認されなかったものの、東壁のやや北よりに焼土の飛散が認められ、この方向にカマドがあったものの、１号溝の構築の際に破壊されたものと思われる。

13号竪穴住居跡出土遺物（第35図）

１は土師器甕の破片である。内面はケズリによって頸部を作り出す。

２）　竪穴状遺構

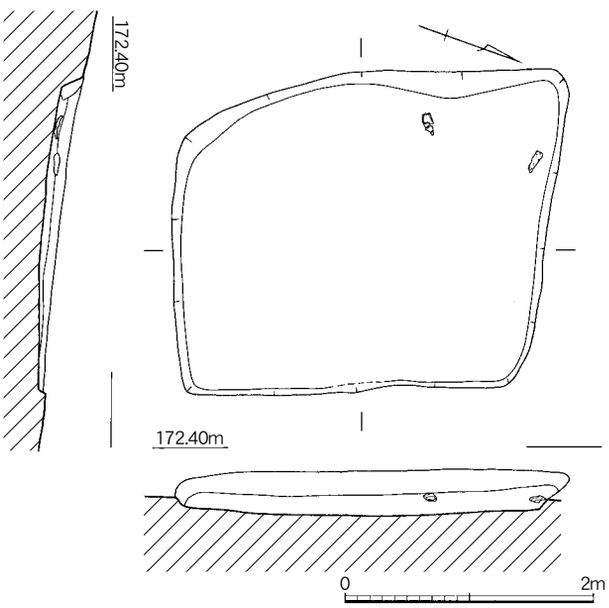
１号竪穴状遺構（第36図、図版４）

調査区中央部にて検出された遺構で、３号竪穴住居跡、４号土坑を切る。確認面での規模は

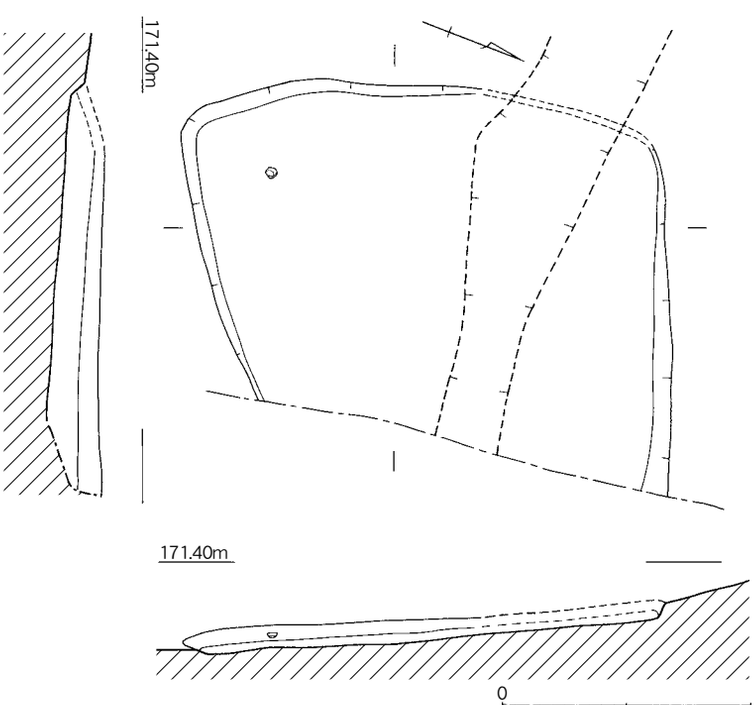
南北長約３ｍ、東西長約2.6ｍ、深さ約20㎝を測り不正方形を呈する。床面はほぼ平らになっており、やや東側にむかって下がっている。

１号竪穴状遺構出土遺物（第39図）

１は砥石である。各面に使用痕が残り、裏面には粗砥ぎに使用されたと思われる擦痕が激しく残存し、全体に研きの際についたと思われる細かい擦痕がみられる。全体長は18㎝、最大幅5.8㎝、厚さ3.0㎝を測る。石材は硬質安山岩である。２は土師器の把手である。甑あるいは甕についていたものと考えられる。外面にはケズリにて調整される。



第36図　１号竪穴状遺構実測図（1/60）



第37図　２号竪穴状遺構実測図（1/60）

２号竪穴状遺構（第37図、図版４）

調査区北側にて検出された遺構で、２号溝に切られている。確認面での規模は南北長約3.8ｍ、深さ約10㎝を測り、不正方形を呈する。床面は南側に向かって若干下がっている。

２号竪穴状遺構出土遺物（第39図）

３は縄文土器の深鉢の底部と思われる。底面は平底で、やや底面に張り出している。内外ともにナデにて調整される。

３号竪穴状遺構（第38図、図版４）

調査北側にて検出された遺構で、１号土坑に切られている。確認面での規模は南北長約３ｍ、深さ約20㎝を測り、方形を呈する。床面が南側に緩やかに下がっている。

３号竪穴状遺構出土遺物

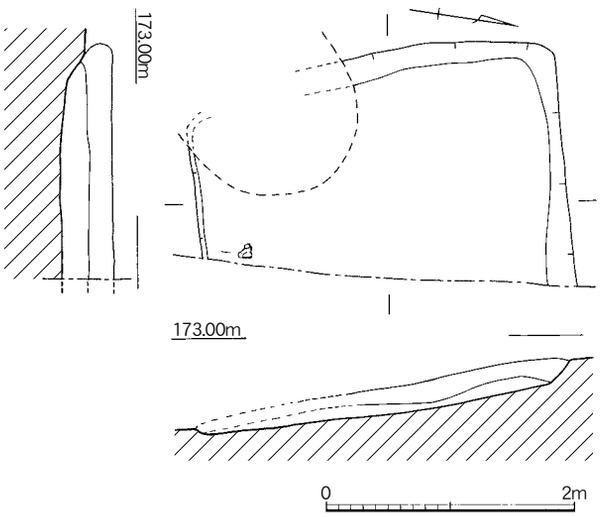
（第39図）

4は須恵器坏蓋である。やや平たい形状を呈し、口縁部は緩やかに下方に下がっている。天井部にかけては回転ヘラケズリ、口縁部から内面にかけては回転ナデが施される。

３）　溝

１号溝（第40図、図版5）

調査区中央を走る溝で、８号竪穴住居、９号竪穴住居、11号竪穴住居、13号竪穴住居を切っている。調査区内での長さ18ｍ、深さ約30㎝を測る。東西方向に曲がっ



第38図　３号竪穴状遺構実測図（1/60）

た後、南北方向にほぼ直角に曲がるＬ字型を呈する。断面形は浅い逆台形を呈し、掘りなおしなどの跡は見られなかった。住居跡付近では床面に住居跡の埋土と同一の土層が流れ込んだ跡が検出され、９号竪穴住居跡カマドに使用されたものと考えられる凝灰岩の板石などが流れ込んだ状態で検出された。また、溝の西側の一部には溝と同一方向でかなり最近のものと考えられる撹乱が見られていた。遺物の出土は見られなかった。

１号溝出土遺物（第43図）

１は縄文土器の底部片である。内外ともにナデ調整が施される。

２号溝（第41図、図版５）

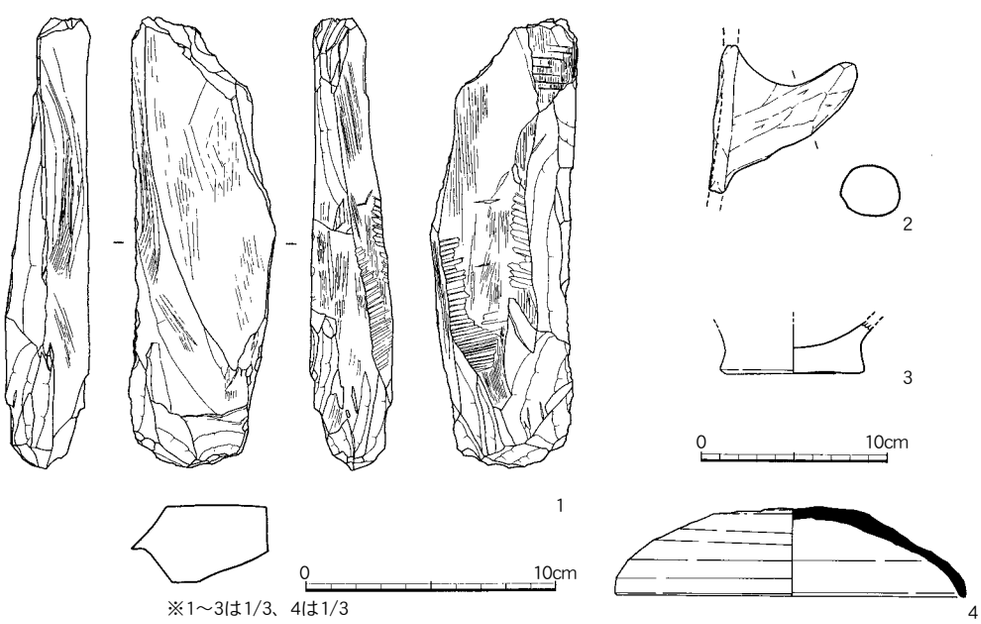
調査区やや北よりにて検出された遺構で、12号竪穴住居、２号竪穴状遺構を切る。調査区内での規模は約７ｍ、深さ約15㎝を測り、断面形は浅い逆台形状を呈し、やや曲がりながら東西方向に伸びている。遺物の出土は見られなかった。

３号溝（第42図、図版５）

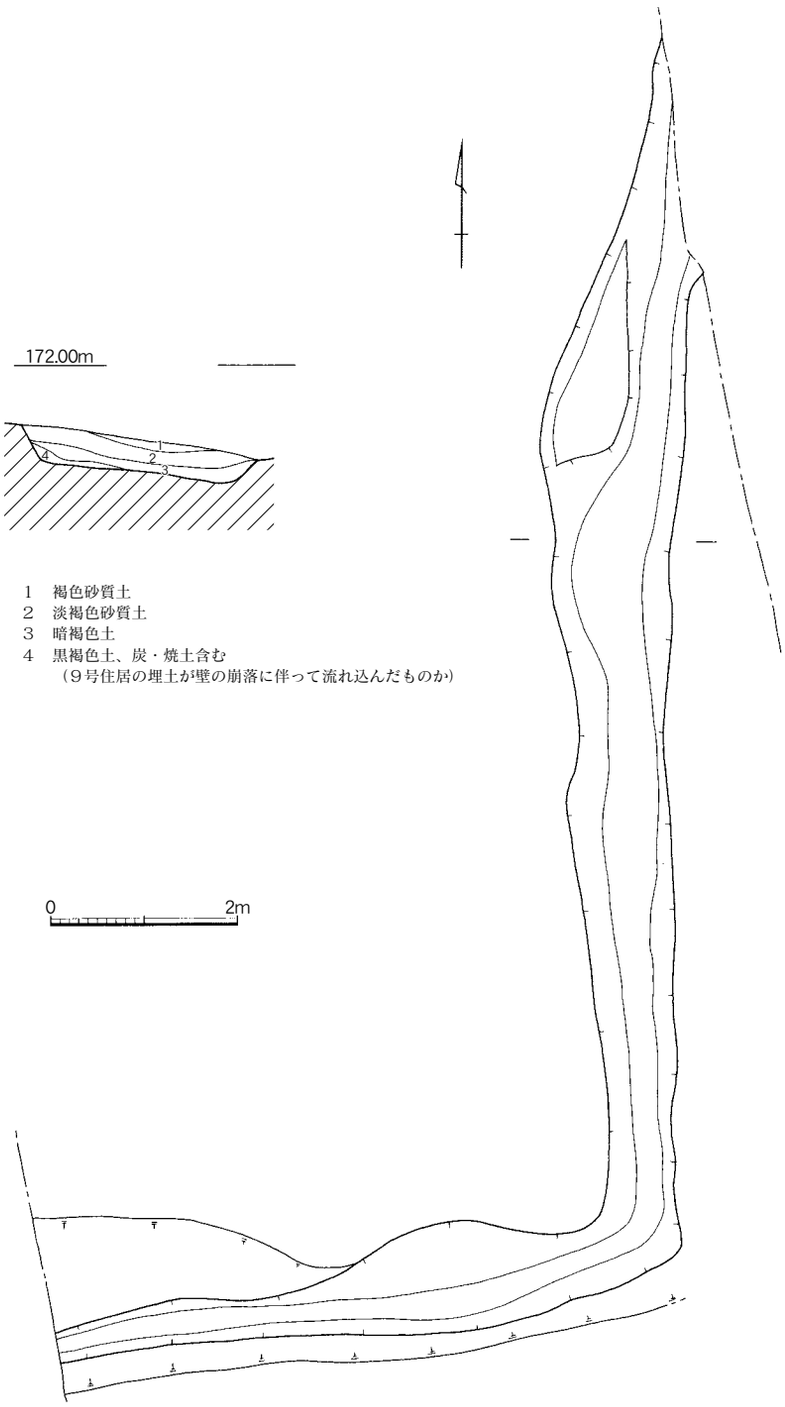
調査区北側にて検出された遺構で、３号竪穴、１号土坑に切られる。やや蛇行しながら、北東方向から南西方向に流れ、断面形は浅い台形を呈する。

３号溝出土遺物（第43図）

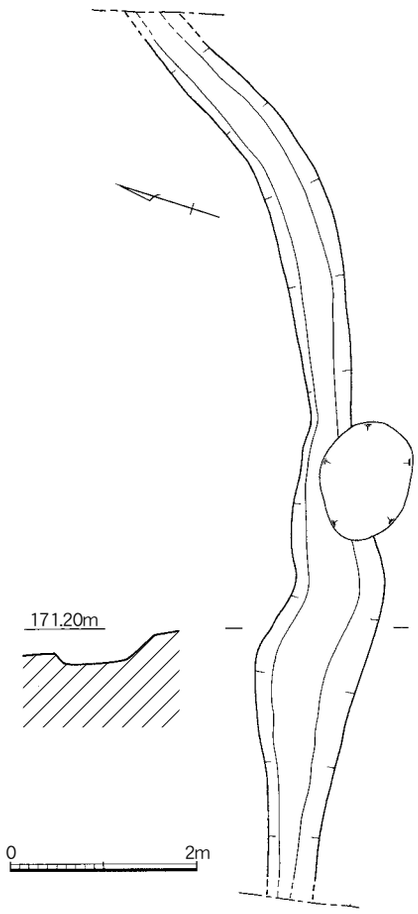
２は土師器の甑の破片である。内外ともにナデ調整が施される。３は土師器の甕である。内面はケズリが施され、明瞭な屈曲が施され、口縁部は緩やかに外反する。



第39図　１、２、３号竪穴状遺構出土遺物実測図（1/3、1/4）



第40図　１号溝実測図（1/80）



第41図　2号溝実測図（1/80）

４）　土坑

１号土坑（第44図、図版５）

調査区北側にて検出された遺構で１号溝、３号竪穴を切る。確認面での規模は長さ約4.4m、幅約2.2mを測り、不正円形を呈する。床面中央部付近がやや下がる。土師器の小破片が出土した。。

２号土坑（第44図、図版５）

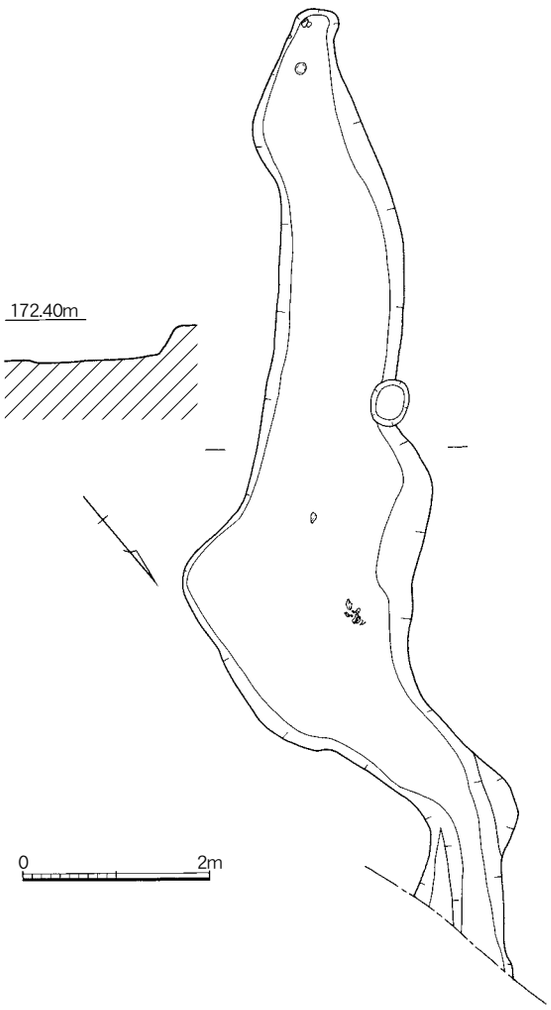
調査区南側にて検出された遺構で、大半が調査区外にかかる。長さ約1.5mを測り、楕円形を呈する。

２号土坑出土遺物（第46図）

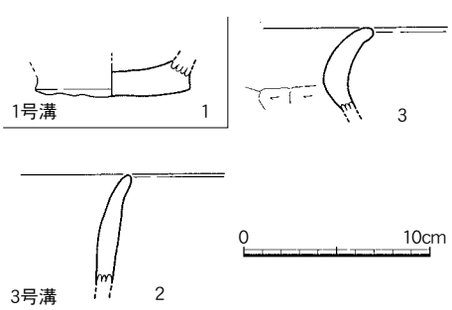
１は石鏃である。器面の風化が著しい。最大長2.1㎝、最大幅1.2㎝、最大厚3.9㎜を測る。石材は安山岩製である。

３号土坑（第44図、図版５）

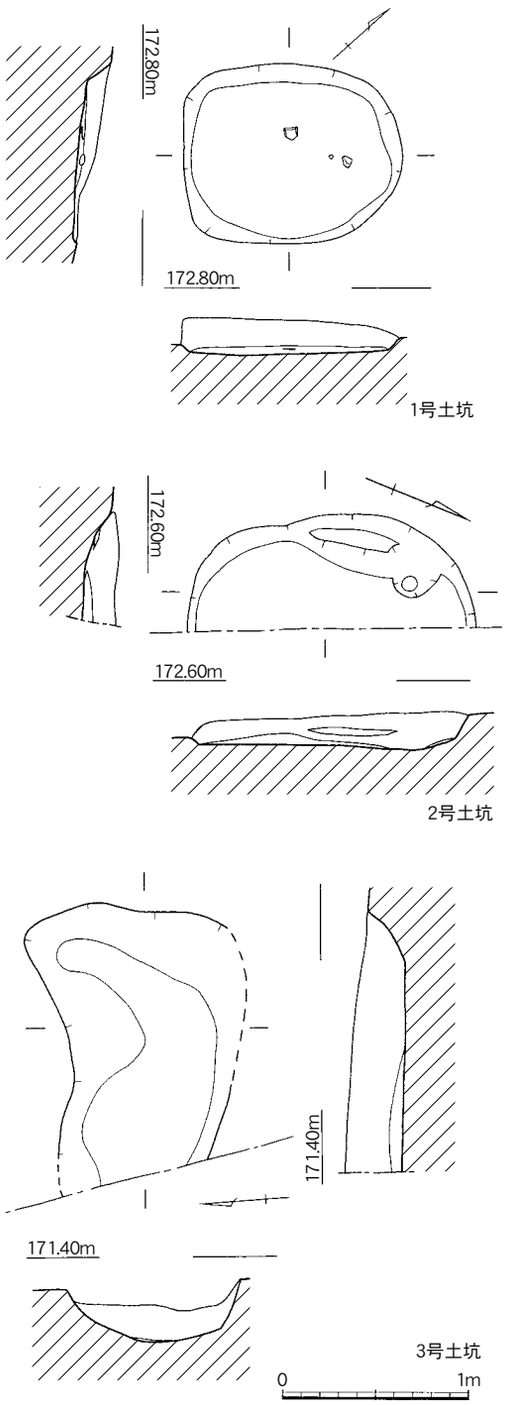
調査区中央にて検出された遺構で、調査区外に一部かかっている。全体の形状は不明である



第42図　３号溝実測図（1/80）



第43図　１、３号溝出土遺物実測図（1/4）



第44図　１、２、３号土坑実測図（1/40）

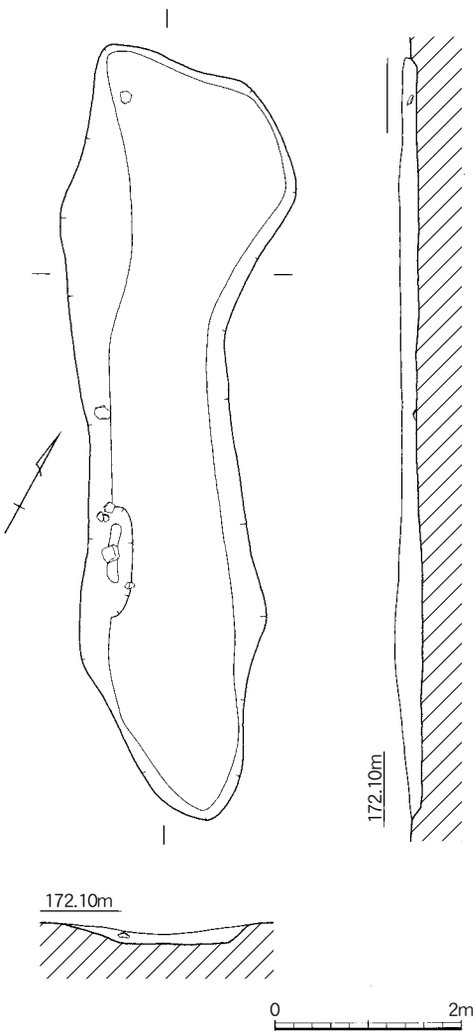
が、南北幅約1.1ｍ、深さ約30㎝を測り、不整形を呈する。

３号土坑出土遺物（第46図）

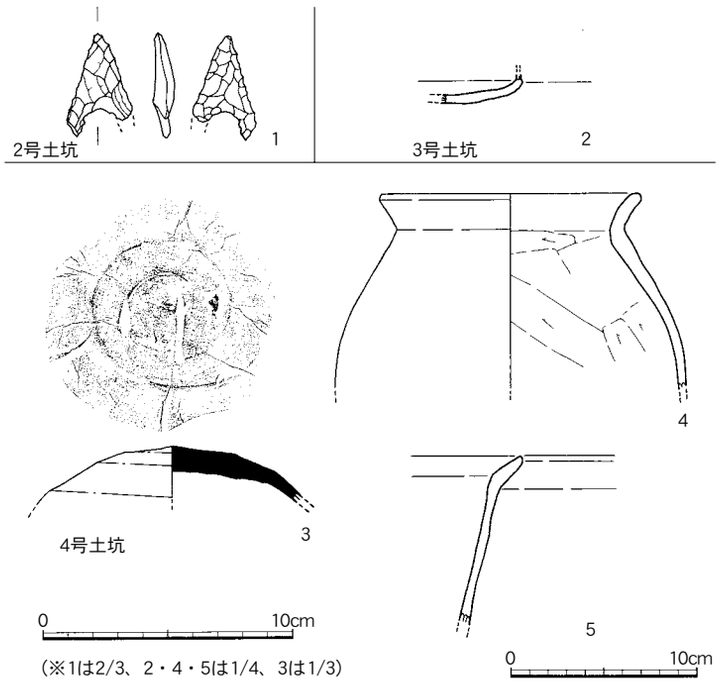
２は土師器皿である。頸部に明瞭な屈曲を持ち、緩やかに立ち上がる。内外ともに回転ナデが施される。

４号土坑（第45図、図版５）

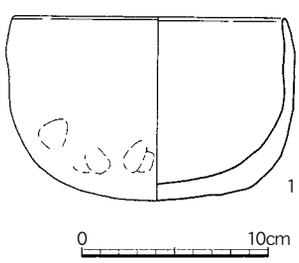
調査区南側にて検出された遺構で、３号竪穴住居、１号竪穴状遺構に切られる。確認面での規模は長さ約４ｍ、幅約１ｍを測り、細長い溝状を呈する。



第45図　４号土坑実測図（1/40）



第46図　土坑出土遺物実測図（1/3、1/4）



第47図　柱穴出土遺物実測図（1/4）

４号土坑出土遺物（第46図）

３は須恵器坏蓋である。天井部に回転ヘラケズリ、口縁部にかけて、及び内面には回転ナデが施される。天井部にはヘラ記号が施される。4は土師器甕である。胴部は緩やかにふくらみ、口縁部は緩やかに外反する。胴部内面にはケズリが施される。５は土師器甕の口縁部か。頸部に屈曲を持ち、口縁部は外反する。胴部内面にはケズリが施される。

５）　柱穴

調査区内からはいくつかのピットが確認されたが、いずれも建物になるものは見られなかった。

柱穴内出土遺物（第47図）

１はピット１より出土した土師器椀である。底面はやや平たくなり、口縁部は垂直に立ち上がる。外面には指頭圧痕が残る。

第Ⅳ章　まとめ

葛原遺跡の調査成果について以下にまとめる。

今回の調査では主に古墳時代後期を中心とした竪穴住居跡13軒、溝３条、竪穴状遺構３基、土坑３基が検出された。特に２号竪穴状遺構、２号土坑に関しては縄文時代の遺物が含まれることから、縄文時代の可能性、１、２号溝に関しては古墳時代以降の可能性が考えられるとともに、調査区中央部付近では縄文時代と考えられる包含層も検出されていることから、今回の調査区周辺部では縄文時代及び古墳時代に集落が営まれていたことが明らかになった。

古墳時代後期の集落はその出土遺物から３つの時期に区分することが出来る。まず最も古い（１期）と考えられるのは10号竪穴住居跡で、出土している須恵器坏蓋の口縁端部に段が残ることなどから、６世紀前半代～中頃に位置付けられると考えられる。また、10号竪穴住居跡に切られる11号竪穴住居跡もこの時期に位置付けられる。次に（２期）１、３、４、６、７、８、９号竪穴住居跡は、須恵器坏蓋口縁部内面に沈線や浅い段が形成されることや坏身の形状、３号竪穴住居跡の提瓶の把手の形状などから、６世紀の中頃に相当するものと考えられる。したがって３号竪穴住居跡に切られる４号土坑、７号竪穴住居跡に切られる13号竪穴住居跡はこの時期以前に位置付けられる。３期目に相当する２、12号竪穴住居跡、３号竪穴状遺構は須恵器杯身の口径が小さくなること、高坏にスカシが入ることなどから、６世紀後半にあたると考えられる。これらの時期に明瞭に区分できない遺構としては、５号竪穴住居跡は切り合いから２から３期に相当し、３号溝は３期以降、１号土坑は２期以降、４号土坑は２期以前、１、３号土坑、１、２号溝は３期以降に相当するものと考えられ、特に、１、２号溝は住居跡を完全に破壊する形で形成されていることから、古代以降のものではないかと考えられる。

さて、以上のように集落の時期区分を行ったが、その結果から、葛原遺跡Ｊ区における集落の形成過程について検討を行いたいと思う。まず、最初にこの地が利用されるのは縄文時代であり、土坑や竪穴状遺構などが形成される。周辺には縄文時代後期の竪穴住居跡が発見されたＩ区が所在すること、２号竪穴状遺構出土の縄文土器の底部などからこれらの遺構の時期も縄文時代後期の可能性が考えられる。次にこの場所が集落として利用されるのは古墳時代後期、６世紀に至ってからである。１期には調査区中央部にある緩やかな谷地に11号竪穴住居跡が営まれるようになり、その後10号竪穴住居跡が作られる。この２軒の住居跡が切り合うことから、調査区北西側に一軒のみが営まれ、建替えが行われたものと考えられる。２期に至るとこの地が最も利用されるようになる時期になる。集落の利用箇所が広範囲に広がり、調査区の多くの箇所で集落が営まれる。１期の10･11号竪穴住居跡周辺には４、６、９号竪穴住居跡などが営まれ、南側には３、７、８、13号竪穴住居跡、更に南奥には１号竪穴住居跡が営まれる。それぞれの住居跡の切り合い関係などから、この時期には２～３軒ほどの住居が建替えを行いながら継続して営まれていた可能性が考えられる。３期は集落の終焉期にあたり、２号竪穴住居跡、12号竪穴住居跡が営まれるのみであり、重複関係にないことから、建替えも行われなかったのではないかと考えられる。このようにして６世紀後半期以降にはこの場所は殆ど利用されることがなくなるものの、その後１号溝や２号溝などが形成され集落以外の場として利用されるものと考えられる。

以上のように葛原遺跡では集落変遷過程を把握することが出来る。さて、これまでの周辺部の調査成果からは、Ａ～Ｆ区において古墳時代後期の集落が検出されている。Ａ～Ｆ区は比較的平坦な台地上に位置しているのに対し、今回の調査区は更に東奥の谷を挟んだ独立丘陵上に位置している。このことは、葛原台地上に古墳時代後期に集落が形成される際、一箇所に集中して集落を営むのではなく、複雑に入り組んだ台地上の様々な場所に拠点を築き、生活を営んでいたことを物語っている。葛原台地そのものが平坦な台地ではなく、細かに入り組んだ地形を形成していることから、これらの様々な場所に集落を形成していたものと考えられる。

また、今回の調査区から検出された殆んどの竪穴住居跡からは主柱穴を確認することが出来なかった。日田地域における古墳時代から古代にいたる竪穴住居跡の構造は地域などによって特色が異なるものの、４本柱から主柱穴なしに変遷する傾向がある。本遺跡の竪穴住居跡は６世紀中頃にも関わらず主柱穴が確認できなかったことから、地域色なども考えられるが、主柱穴を掘り込まず新たな建築構造への変化を示す一例となることが考えられる。カマドの方向に関しても日田地域では北か東西方向に取り付けられることが多いようであり、本遺跡の例でもその多くが当てはまる。その点からしても建物の構造は地域色というよりも時期差の可能性が考えられるのではないだろうか。

第２表　観察表

図版	番号	遺構名	種別	器種	法量（　）は復元径(cm)			胎土	色調	備考
					器高	口径	底径	石英／A・長石／B・角閃石／C・金雲母／D 赤色粒／E・白色粒／F・黒色粒子／G		
8	1	１号住居跡	須恵器	坏身		(13.4)		Ａ．Ｂ	青灰色	
	2	１号住居跡	土師器	甕				Ａ．Ｂ．Ｃ	黄褐色	
11	1	２号住居跡	須恵器	蓋				Ｂ	淡青灰色	
	2	２号住居跡	須恵器	坏				Ｂ	淡青灰色	
	3	２号住居跡	須恵器	高坏				Ｂ．Ｇ	淡緑灰色	
	4	２号住居跡	土師器	甕		(20.3)		Ａ．Ｂ．Ｃ	淡黄褐色	
	5	２号住居跡	土師器	鉢				Ａ．Ｂ．Ｃ	淡黄褐色	
	6	２号住居跡	土師器	甕				Ａ．Ｂ．Ｃ	淡黄褐色	
	7	２号住居跡	土師器	甕				Ａ．Ｂ．Ｃ	淡黄褐色	
	8	２号住居跡	土師器	把手				Ａ．Ｂ．Ｃ．Ｄ	淡黄褐色	
13	1	３号住居跡	須恵器	蓋	3.6	(13.0)		Ａ．Ｂ	淡青灰色	
	2	３号住居跡	須恵器	坏蓋	4.2	12.6		Ａ．Ｂ	青灰色	
	3	３号住居跡	須恵器	提瓶				Ａ．Ｂ	淡青灰色	
	4	３号住居跡	須恵器	鉢				Ａ．Ｂ	青灰色	
	5	３号住居跡	須恵器	高坏				Ｂ	暗青灰色	
	6	３号住居跡	土師器	把手				Ａ．Ｂ．Ｃ．Ｄ	淡黄褐色	
15	1	４号住居跡	須恵器	蓋		(14.0)		Ａ．Ｂ	淡緑灰色	
	2	４号住居跡	須恵器	坏		(12.8)		Ｂ	淡青灰色	
	3	４号住居跡	土師器	甕				Ａ．Ｂ．Ｃ	淡黄褐色	
	4	４号住居跡	土師器	甕				Ａ．Ｂ．Ｃ	淡黄褐色	
18	1	６号住居跡	須恵器	坏				Ａ．Ｂ	青灰色	
21	1	７号住居跡	須恵器	坏				Ｂ	青灰色	
	2	７号住居跡	須恵器	坏				Ｂ	淡青灰色	
	3	７号住居跡	須恵器	甕				Ａ．Ｂ	淡灰白色	
	4	７号住居跡	須恵器	甕		(14.4)		Ｂ	青灰色	
	5	７号住居跡	土師器	甕				Ａ．Ｂ．Ｄ．Ｅ	淡黄褐色	
23	1	８号住居跡	須恵器	坏身		11.9		Ａ．Ｂ	青灰色	受径 13.6
	2	８号住居跡	須恵器	甕	30.6	15.8		Ａ．Ｂ	青灰色	
	3	８号住居跡	須恵器	甕		23.3		Ａ．Ｂ．Ｃ	青灰色	
	4	８号住居跡	土師器	甕		(23.3)		Ａ．Ｂ．Ｃ．Ｄ	淡黄褐色	
	5	８号住居跡	土師器	把手				Ａ．Ｂ．Ｃ．Ｅ	淡黄褐色	
26	1	９号住居跡	須恵器	坏				Ａ．Ｂ	青灰色	
	2	９号住居跡	須恵器	蓋				Ｂ	淡青灰色	
28	1	10 号住居跡	須恵器	蓋	(4.05)	(11.9)		Ａ．Ｂ	青灰色	
	2	10 号住居跡	須恵器	坏		(11.5)		Ａ．Ｂ．Ｇ	青灰色	外面一部黒灰色
	3	10 号住居跡	須恵器	長頸壺？				Ｂ	青灰色	
	4	10 号住居跡	須恵器	高坏				Ｂ．Ｇ	暗青灰色	
29	1	11 号住居跡	須恵器	高坏				Ｂ	淡青灰色	
	2	11 号住居跡	須恵器	甑				Ｂ	青灰色	
33	1	12 号住居跡	須恵器	坏身	3.8	10.9		Ａ．Ｂ	淡赤褐色	受部 12.6
	2	12 号住居跡	須恵器	坏				Ａ．Ｂ	青灰色	
	3	12 号住居跡	須恵器	高坏				Ａ．Ｂ．Ｄ	青灰色	
35	1	13 号住居跡	土師器	甕				Ａ．Ｂ．Ｃ．Ｄ	黄褐色	
39	2	１号竪穴	土師器	把手				Ａ．Ｂ．Ｃ	淡黄褐色	
	3	２号竪穴	縄文	深鉢				Ａ．Ｂ．Ｃ	暗黄褐色	
	4	３号竪穴	須恵器	蓋	3.6	14.0		Ａ．Ｂ	青灰色	
43	1	１号溝	縄文	深鉢			8.4	Ａ．Ｂ	淡黄褐色	
	2	３号溝	土師器	甑				Ａ．Ｂ	淡黄褐色	
	3	３号溝	土師器	甕				Ａ．Ｂ．Ｃ	暗黄褐色	
46	2	３号土坑	土師器	皿				Ａ．Ｃ	淡黄褐色	
	3	４号土坑	須恵器	蓋				Ａ．Ｂ．Ｃ	淡青灰色	
	4	４号土坑	土師器	甕		(14.0)		Ａ．Ｂ．Ｃ	黄褐色	
	5	４号土坑	土師器	甕				Ａ．Ｂ．Ｃ	黄褐色	
47	1	P-1	土師器	鉢	9.8	14.6		Ａ．Ｂ．Ｄ	黄褐色	

写　真　図　版

①遺構検出状況（南から）

①調査区全景（真上から）

図版２

①調査区中央部（真上から）

②１号竪穴住居跡

③２号竪穴住居跡

④２号竪穴住居跡カマド

⑤３号竪穴住居跡

① 4 号竪穴住居跡

② 5 号竪穴住居跡

③ 6 号竪穴住居跡

④ 7 号竪穴住居跡

⑤ 8 号竪穴住居跡

⑥ 8 号竪穴住居跡遺物出土状況

⑦ 9 号竪穴住居跡

⑧10号竪穴住居跡

図版４

①10号竪穴住居跡火床面

②11号竪穴住居跡

③12号竪穴住居跡

④12号竪穴住居跡遺物出土状況

⑤13号竪穴住居跡

⑥１号竪穴状遺構

⑦２号竪穴状遺構

⑧３号竪穴状遺構

① 1 号溝

② 1 号溝土層

③ 2 号溝

④ 3 号溝

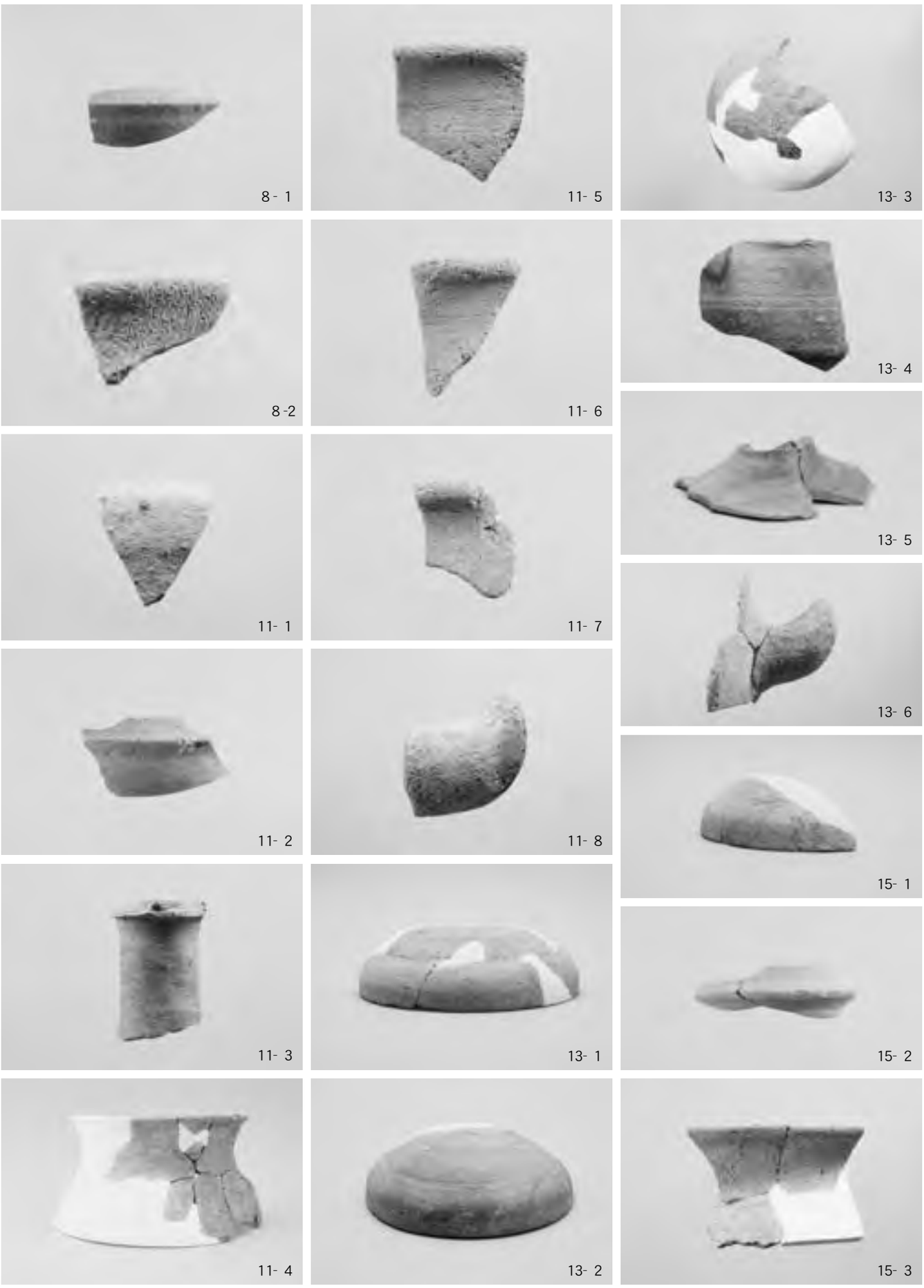
⑤ 1 号土坑

⑥ 2 号土坑

⑦ 3 号土坑

⑧ 4 号土坑

図版６



出土遺物①
（※ 図版中の番号は全て挿図番号と一致する）

15- 4

21- 5

26- 1

18- 1

23- 1

26- 2

21- 1

23- 2

28- 1

21- 2

23- 3

28- 2

21- 3

23- 4

28- 3　28- 4

30- 1

21- 4

23- 5

30-2

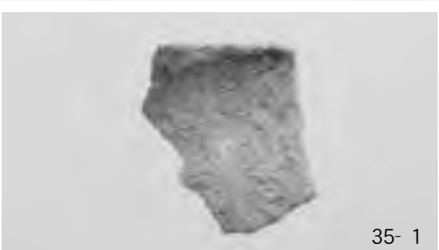
出土遺物②
（※ 図版中の番号は全て挿図番号と一致する）

図版８

33- 1

33- 2

33- 3


35- 1

39- 2

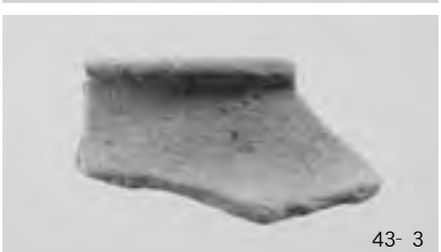
39- 1
（表）

39- 3

39- 4

43- 1

43- 2


43- 3

39- 1
（裏）

46- 3

46- 4

46- 5

46- 1
（表）

46- 1
（表）

46- 2

47- 1

出土遺物③
（※ 図版中の番号は全て挿図番号と一致する）

報　告　書　抄　録

ふりがな	くずばるいせき
書名	葛原遺跡
副書名	県営日田地方広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財報告書
巻次	５
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第39集
編著者名	渡邉隆行
編集機関	日田市教育委員会
所在地	〒877－8601　日田市田島２－６－１
発行年月日	2002.12.27

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（しょざいち）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
葛原遺跡（くずばるいせき）	日田市大字西有田（ひたしおおあざにしありた）字葛原（あざくずばる）	44204－6	651057	33″21	131″25	20010802～2001092	900㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
葛原遺跡	集落	古墳時代	竪穴住居跡	13軒	縄文土器、石器、土師器 須恵器	
			溝	３条		
			土坑	４基		
			竪穴状遺構	３基		

発掘調査に参加された皆さん

（亡くなられた調査作業員の高倉美利氏のご冥福をお祈りいたします。）

葛原遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書
第39集
平成14年12月27日

発行　日田市教育委員会
大分県日田市田島2丁目6-1

印刷　日田時報紙器印刷㈱
大分県日田市二串町345-3